

西南戦争遺跡
明德官軍墓地調査報告書

2025

熊本市教育委員会

西南戦争遺跡
明德官軍墓地調査報告書

2025

熊本市教育委員会



全景（北西から）



全景（北東から）



全景（西から）



向坂（昭和 20 年代の撮影とみられる）



現在の向坂（左写真と同じアングル）

序

わが国が近代化への道を進めるなかで、大きな転換点となったのが明治10年の西南戦争です。近代史上最後の内戦であり、九州一円がその舞台となりました。なかでも、熊本市は主戦場となり市内各地で戦いが繰り広げられ、その戦禍は戦時だけでなく、後の時代にも大きな影響を与えました。

熊本市は、市の成り立ちに大きく関わった西南戦争について、現在に残る様々な痕跡を文化財「西南戦争遺跡」と捉え、これを適切に保護し継承していくため、国史跡とすることを目指し、平成21年度から学術的な視点を踏まえた現地調査を実施してきました。結果、平成25年には、激戦地として知られる田原坂と田原坂公園の範囲が、わが国の近代史を知るうえで極めて重要であり、概ね保存状態も良好であるとして、国史跡に指定されました。

また、熊本市は、指定後も西南戦争遺跡のさらなる保護拡充を目指し、現地調査を続けてきました。そのなかで実施した地点の一つが明德官軍墓地です。

西南戦争では多くの犠牲者が出ており、市内各所には政薩両軍の墓地などが点在しています。これらの墓地に立つ時、戦いが後のわが国の発展へと繋がる契機になったとはいえ、そこに眠る彼ら犠牲者への哀悼の念を抱かずにはおれません。墓地はそうした慰霊の対象ではありますが、同時に、戦争の事実を物語る確かな歴史資料でもあります。

明德官軍墓地についても、先に触れましたように、西南戦争遺跡を構成する要素として、また、戦いの実態や当時の社会・文化を反映する歴史資料—文化財としてこれを捉え、調査を実施しました。

本報告書は、その調査成果をまとめたものです。本書が、西南戦争遺跡をはじめとする近代遺跡だけではなく、広く文化財の研究資料として供され、さらには文化財の保護・活用、普及の一助となれば幸甚です。

最後になりましたが、現地調査や本書の作成にあたり、ご協力いただいた関係者の皆様に対し、心より感謝の意を申し上げます。

熊本市教育委員会

教育長 遠藤 洋路

例 言

1. 本書は西南戦争遺跡の学術的価値付けと記録を目的として実施した、熊本市北区明徳町 1277 に所在する熊本県指定史跡明徳官軍墓地（国有地）の調査報告書である。
2. 本書の名称を『西南戦争遺跡 明徳官軍墓地調査報告書』とする。
3. 明徳には2箇所の官軍墓地が存在しており、それぞれの小字名をとって明徳上市原官軍墓地、明徳寄鶴官軍墓地と称されている。本書で主に扱うのは前者で、指定件名に従い名称を「明徳官軍墓地」とする。
4. 調査主体は熊本市教育委員会である。国庫補助事業として、文化庁・熊本県文化課の指導のもと実施した。
5. 現地調査は平成 28 年度・平成 29 年度、令和 6 年度に、報告書作成は令和 6 年度に行なった。
6. 現地図面（墓地全体配置図・詳細平面図）の作製は業務委託した測量業者が行ない、その他の観察・記録は熊本市文化財担当職員が行なった。
7. 報告書作成は、熊本市文化財資料室植木分室において行なった。
8. 調査に関わる図面・写真は熊本市文化財資料室植木分室に保管している。
9. 本書の編集・執筆は、美濃口雅朗（熊本市文化財課文化財保護主任主事）が行なった。

目 次

本文

第 I 章 調査の経過と目的	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査組織	1
3. 現地調査日誌抄	2
4. 調査の目的	2
第 II 章 位置と環境	3
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	7
第 III 章 調査の成果	12
1. 概要	12
2. 墓地の現状と変更	21
3. 墓石の配置	25
4. 墓石の形状・規模	26
5. 墓石の石材・調整技法	27
6. 墓石の記銘	27
7. 向坂の戦いの概要と戦死者墓地	35
8. 墓地建設の経緯	38
第 IV 章 熊本地震による被害	39
1. 墓石の被害状況	39
2. 墓石の修復	40
第 V 章 まとめ	41

挿図

第 1 図 周辺地形図	3
第 2 図 周辺遺跡分布図	4
第 3 図 周辺の西南戦争関連資料分布図	8

第 4 図 熊本県内における西南戦争の主な戦闘と関連墓地	9
第 5 図 熊本県内における西南戦争関連病院	10
第 6 図 寄鶴官軍墓地墓石実測図	11
第 7 図 明徳官軍墓地全体図	12
第 8 図 墓石詳細平面図	15
第 9 図 明治 19 年作製の明徳官軍墓地配置図	21
第 10 図 七本官軍墓地配置図	25
第 11 図 明徳官軍墓地 階級ごとの配置図	25
第 12 図 階級ごとの墓石の規模	26
第 13 図 別役成義文書の甲乙 2 案	28
第 14 図 明徳官軍墓地墓石銘分類集計グラフ	34
第 15 図 『従征日記』2 月 27 日挿図「高瀬ノ死傷者ヲ南関へ送ルノ図」	37
第 16 図 仮埋葬地の位置図	38
第 17 図 熊本地震被害状況図	39

表

第 1 表 周辺の遺跡一覧表	5
第 2 表 周辺の西南戦争関連資料一覧表	7
第 3 表 明徳官軍墓地 墓石銘一覧表	17
第 4 表 墓石の規模計測表	26
第 5 表 墓石記銘「異字」一覧表	30
第 6 表 向坂の戦いの参戦部隊想定表	35
第 7 表 他の墓地における 3 月 20 日 向坂の戦いの戦死者墓一覧表	36
第 8 表 熊本地震による墓石被害状況一覧表	40

第 I 章 調査の経過と目的

1. 調査に至る経緯

熊本市は、明治 10 年（1877）に我が国近代史の画期となった西南戦争が開戦し、そこから間もない 2～4 月、著名な「田原坂の戦い」だけでなく各所で戦闘が繰り広げられた地である。

このことを踏まえ、本市（当時は鹿本郡植木町）は平成 8 年の文化庁通知「近代遺跡調査実施要項」に述べられている「我が国の近代の歴史を理解する上で欠くことのできない重要な遺跡について適切な保護をはかることが急務となっている（中略）平成 8 年度から近代遺跡の全国調査を実施する。」との趣旨と以下に列記する遺跡の選択基準に照らし、町内に存在する田原坂周辺の西南戦争関連資料がこれに合致するものとして、熊本県教育委員会の指導のもと対応を進めた。

- 近代史の各分野において、学術研究上重要な意義を有する遺跡である。
- 遺跡の保存状態が良好で、遺跡にかかわる建造物、遺構、敷地等が良好に保存されている。
- 対象時期は幕末・開国頃から第二次世界大戦終結頃まで、対象遺跡分野は政治・経済・社会・文化その他すべての分野とする。

結果、平成 15 年 11 月、文化庁記念物課長から植木町教育長あてに「近代遺跡（軍事に関する遺跡）の詳細調査について」の依頼があり、平成 21 年 8 月には町に隣接し同じく西南戦争関連資料が存在する玉名郡玉東町とともに「植木町・玉東町西南戦争遺跡群連携保存活用協議会」を発足して、両町が国史跡指定に向けて連携を図ることとした。

以上を踏まえ、植木町教育委員会は国庫補助事業として平成 21 年度から田原坂周辺の現地調査を開始し、平成 22 年度からは市町村合併に伴って熊本市教育委員会が調査主体となり、平成 29 年度まで実施した。その間、平成 25 年 3 月には田原坂本道と田原坂公園の範囲が国史跡に指定された。なお、調査に際しては、調査方法や成果の検証を行なうための検討委員会を設置し、その指導を仰ぎながら実施した。

本報告地である明徳官軍墓地については、上記の一環として平成 28・29 年度に現地調査を、令和 6 年度に現地調査の補足と整理作業・報告書作成を行なった。

2. 調査組織

調査組織は以下の通りである。

平成 28 年度

調査主体：熊本市教育委員会

事務局：濱田安拡（熊本市経済観光局文化・スポーツ交流部文化振興課長）、中本正人（同副課長）、上杉重文（同課埋蔵文化財調査室長）、岩野良彦（同室総務班主査）、寺尾知子・堀坂太郎（同班主任主事）

調査担当：中原幹彦（埋蔵文化財調査室調査第 3 班文化財保護主幹兼主査）、那須和貴（同室嘱託職員）

西南戦争遺跡調査検討委員：水野公寿・鈴木 淳・浅川道夫（以上専門員）、内古閑龍一・宮崎喜一・谷口憲治・松山信房・宮野正道（以上地元代表員）

業務委託：大成ジオテック株式会社

平成 29 年度

調査主体：熊本市教育委員会

事務局：濱田安拡（熊本市経済観光局文化・スポーツ交流部文化振興課長）、中本正人（同副課長）、上杉重文（同課埋蔵文化財調査室長）、岩野良彦（同室総務班主査）、寺尾知子・堀坂太郎（同班主任主事）

調査担当：美濃口雅朗（埋蔵文化財調査室調査第 3 班文化財保護主幹兼主査）

西南戦争遺跡調査検討委員：水野公寿・鈴木 淳・浅川道夫（以上専門員）、内古閑龍一・宮崎喜一・谷口

憲治・松山信房・松本順二（以上地元代表員）

業務委託：大成ジオテック株式会社

令和6年度

調査主体：熊本市教育委員会

事務局：福居浩一（熊本市文化市民局文化創造部文化財課長）、赤星雄一（同副課長）、緒方 健（同課総務班主任主事）

調査担当：美濃口雅朗（同課文化財保護主任主事）

3. 現地調査日誌抄

平成28年度

8月16～同月25日 熊本地震被害状況確認・応急復旧。墓石清掃。

10月27日～2月28日 墓地全体配置図作成（業務委託）。

平成29年度

6月12日～2月28日 墓地詳細平面図作成（業務委託）。

6月14～同月30日 業務委託図の加筆修正。墓石の観察。

令和6年度

10月1日～同月24日 墓石の観察。主に記銘の癖字・異字についての補足調査。

4. 調査の目的

a. 西南戦争遺跡の概要

本市では西南戦争関連資料を近代遺跡—西南戦争遺跡と捉え、調査を実施している。

西南戦争遺跡として扱うのは戦場跡だけでなく、本営跡、弾薬製造地跡、軍票製造地跡、病院・繻帯所跡、宿泊所跡、海軍上陸地点、港湾、輜重関連地など戦場の後方に関わる施設、戦後間もない時期に造立された顕彰碑・慰霊碑などの記念碑、政薩両軍の墓地などもその要素となる。田原坂の戦いを例にとれば、豊岡台地や対岸の二俣台地などの戦場跡だけでなく、周辺には戦いに関わるこうした要素が多く見られ、それらを包括して一体の遺跡と捉えることができる。本市が国庫補助事業として実施した現地調査でも戦場跡のほか、田原坂の戦いにおける政府軍攻撃の起点となった豊岡の眼鏡橋、多くの弾痕が認められる田原の五輪塔、明治陸軍が主体となって顕彰・慰霊のために造立した崇烈碑、七本薩軍墓地、七本官軍墓地、明德官軍墓地をその対象とした（熊本市教委2025）。

b. 明德官軍墓地調査の目的

明德官軍墓地の現地調査では、全体配置図・詳細平面図作製（委託事業）に加えて各墓石の観察（略計測・石材観察・記銘の読み取り）を行なった。全体配置図・詳細平面図作成は、過去のものが手書きの見取図だったため正確な図面が必要であること、墓地建設当時のものとみられる配置図等と比べると明らかな変更があり、このため、少なくとも現況での把握が必要であることから実施した。報告でも、この変更について頁を割いている。墓石の観察では、特に記銘の癖字や異字に注視し、より正確な情報を記録することに努めた。

この他、文献資料をもとに墓石の形状・規模や記銘の書き方が規定化される経緯、墓地建設の経緯について調査した。

〔参考文献〕

熊本市教育委員会2025『熊本市の文化財第127集 西南戦争遺跡 田原坂総括調査報告書』

第Ⅱ章 位置と環境

1. 地理的環境（第1・2図）

熊本市の北側には、阿蘇火砕流堆積物を基盤とする広大な洪積台地がひろがっており、肥後台地と総称されている。この台地は中小河川の浸食などにより細分され、市域北側を占めているのは植木台地とこれに連続して南方に伸びる台地（南端側は京町台地）と称され、肥後台地の西端にあたる。

植木台地は、西側は金峰山体に接し、東側は菊池川の一次支流合志川によって画され、北方には菊鹿盆地が広がっている。植木台地から連続して南方に伸びる台地は、熊本城が立地するその南端付近においては京町台地と称される。この台地は、西側は南流する白川の二次支流、井芹川により金峰山体とその裾部の台地とを、東側は同一次支流、坪井川により東方に広がる台地（合志台地）とを画されており、南方には熊本平野が広がっている。阿蘇火砕流堆積面に相当する台地面は平坦で、斜面は20～40m高の急勾配である。台地面の高さは植木台地近くでは標高90～100m台で、ここから南方に向け緩やかに傾斜して南端付近では約40mとなる。明德官軍墓地はこの台地の北側、熊本城からは約8.5kmに位置する。

明德官軍墓地周辺の地形を見ると、東西方向からの支谷が複雑に、また深く入り込んでおり、台地面は幅狭となっている。このため、本台地面には小倉を基点として南関・山鹿・植木を経て熊本城に至る旧豊前街道が貫通して植木から熊本城までほぼ平坦な道が続くものの、周辺においては唯一、支谷を越えるための坂道がある。本墓地は、向坂と通称されるこの坂道を上りきった付近から、東方約80m、南東側の支谷に向けて緩やかに落ちる緩傾斜地に立地する。付近の標高は95m台である。



第1図 周辺地形図 (1/7,000)



第2図 周辺遺跡分布図 (1 / 20,000)

第1表 周辺の遺跡一覧表

※Noは第2図に対応。石造物は主要なものを。

No	遺跡名	時代	特記事項
1	舞尾西原遺跡	縄文・弥生・古代・中世	
2	舞尾薬師堂板碑	中世	逆修板碑、大永3年銘。
3	加川原遺跡	縄文・弥生・古墳・古代	古代：8世紀末～9世紀初頭の竪穴住居。
4	舞尾の板碑・乃木大将記念碑	中世・近代	舞尾の板碑：文明9年銘、六地藏線刻、高さ2m。
5	町裏遺跡	縄文・弥生・古代	
6	植木地藏堂の手洗器	近世	享保3年銘、「味取新町」の名を原位置に留める最古の資料。
7	植木中学校跡・植木学校跡	近代	江戸時代は正院手永会所。植木学校は熊本民権党が中心となり設立、熊本協同隊の母体。香脱石残存。土坑検出(19c後半の陶磁器出土)。
8	五反畑遺跡	縄文・弥生・古代・中世・近代	近代：スナイドル葉莖採集。
9	広住西原遺跡	縄文	
10	東平遺跡	縄文・弥生・古代・中世	中世：草葉の板碑、阿弥陀如来像線刻。
11	山後遺跡	縄文・弥生・古墳・古代	古墳：6c後半～7c前半の竪穴住居。中世：東西方向に伸びる溝。古代：8c末～9c初頭の竪穴住居重複・集中。
12	立石遺跡群(立石駅南推定地)	旧石器・縄文・弥生・古代・中世	縄文：後晩期の埋設土器・竪穴住居。土偶・多量のクロム白雲母製玉類出土。弥生：後期の地点的環壕集落、小形仿製鏡・銅矛?出土。土器相は菊池川水系と白川水系が入り混じる。古代：西海道高原油推定地。9c前半の竪穴住居群、溝。「旨」銘の墨書土器出土。中世：区画溝。
13	東中原遺跡	縄文・弥生・古代・中世	弥生：甕棺検出。中世：後期の区画溝。
14	滴水古閑原遺跡	弥生・古代	
15	投刀塚堀ノ内遺跡	縄文・古代	
16	投刀塚古墳	古墳	直径13.3m、高さ約4mの円墳(現状は削平されて小さい)。埋葬主体不明。
17	四ツ塚遺跡 ※四ツ塚古墳群・薩摩軍追迫柿木台場跡	縄文・弥生・古墳・古代・近代	古墳・小円墳1基。1基は内部主体(安山岩板石)露出。近代：木留・植木方面の戦いにおける薩摩軍台場跡。東野孝之丞墓。
18	山頭遺跡	縄文・古代・中世・近代	縄文：早期の炉穴。古代：8c末～9c初頭の竪穴住居重複・集中、竪立柱建物。石製丸駒・石製楯・土馬出土。中世：後期の区画大溝・竪立柱建物。近代：木留・植木方面の戦いにおける薩摩軍の陣地。堀畑を利用した塹壕から多量の小銃弾・薬莖等出土。
19	野入遺跡	旧石器・縄文・弥生・古代・中世・近代	弥生：後期の竪穴住居。近代：スナイドル銃弾出土。
20	宝出原遺跡	縄文・古代・中世	
21	松尾原横穴群	古墳	3基確認。
22	井上横穴群	古墳	6c末の型式、7基並ぶ。4号は奥扉床が石屋形状。前庭部から7cの須臾器多量出土(追葬あるいは最終埋葬後の供献?)。
23	井上城跡	中世	町道工事以前は堀切・土塁が明確。「観音堀」・「どうこん堀」の小名あり。
24	宮尾横穴群	古墳	9基確認。6c末。
25	寄鶴官軍墓地	近代	西南戦争の政府軍夫墓石1基「軍夫三十名之墓」。
26	小糸山遺跡群 ※小糸山遺跡・小糸山居館跡	旧石器・縄文・弥生・古墳・古代・中世	旧石器：始良In火山吹層から三稜尖頭器出土。弥生：後期の地点的環壕集落。鑄造銚釜・小銅片(銚器製作関連遺物)出土。古墳：5cの竪穴住居。古代：土馬出土。中世：小糸山居館跡は小名「城丸」あり(主郭推定地)、堀に画された西側の高台の小名は「出山」。
27	明徳官軍墓地	近代	西南戦争の政府軍墓石122基、主に3月20日の向坂の戦いの死者。
28	八幡谷横穴群	古墳	1基確認。
29	腹佛長遺跡	縄文・古代・中世	
30	鏡田中尾遺跡	縄文・弥生・古代・中世・近代	縄文：早期の炉穴・集石。近代：スナイドル銃弾出土。
31	沖遺跡	旧石器・縄文・古代・中世	古代：9c後半の竪立柱建物。中世：土塁・堀を検出、居館跡か。
32	北中尾遺跡	旧石器・縄文・弥生・古墳・古代・中世	古墳：6c代の円墳、周溝径16m、主体部は削平。
33	楠野遺跡群※楠野古閑遺跡・楠原城跡	旧石器・縄文・弥生・中世	弥生：後期の竪穴住居。中世：楠原城は隈本城に移る(明応5年)以前の鹿子木氏居城と伝わる。15c埋没の溝は移転(廃城)時期に相当。城域南西に天文11年銘板碑・天正4年銘五輪塔。

No.	遺跡名	時代	特記事項
34	宮ノ前横穴群	古墳	10基以上存在。
35	宮ノ下横穴群	古墳	西南戦争時に土器類発見、「朝顔形皿十枚、壺一個発見セリトイフ」(大正6年の記録)。
36	射の馬場横穴群	古墳	3基確認。高坏、砥石出土。
37	大鳥居遺跡群 ※大鳥居遺跡・井出原禰房跡参考地	縄文・中世	
38	梶尾横穴群	古墳	
39	寂心さんの樟		県指定天然記念物、樹齢推定800年。鹿子木寂心の墓石？を根に巻き込む、脇にも弘化4年造銘墓石。
40	北迫筒井横穴群	古墳	13基以上確認。
41	北迫川底遺跡群 ※北迫川底遺跡・筒井前遺跡	縄文・弥生・古代・中世	
42	柚木菅原神社宝篋印塔	中世	菊鹿型宝篋印塔、笠・基礎部残存、14cの型式。
43	硯川遺跡群 ※北部中学校遺跡・田端遺跡・田端窯跡	旧石器・縄文・弥生・古墳・古代・中世	旧石器：ブロック検出、ナイフ形石器・三稜尖頭器・剥片尖頭器出土。縄文：石器製作跡検出。古代：8c後半～9c前半の竪穴住居・掘立柱建物。田端窯跡は焼土層と須恵器片の堆積層確認(9c前半か)。中世：大溝・柵列による区画、掘立柱建物・竪穴建物・土坑墓。
44	伝鹿子木箱跡	中世	『肥後国誌』『新撰蹟通考』記事より推定。小名「堀ノ内」あり。東側に土壁を伴う幅約3mの空堀。
45	一町畑古墳	古墳	4基確認。
46	六反田横穴群	古墳	縄文時代後期主体。竪穴住居を断面にて検出。
47	四方寄遺跡	縄文	豊前街道沿いの参勤交代時に往来する細川・島津家の休憩所(お茶屋)、江戸時代末の建物。
48	御馬下の角小屋	近世	六地藏：高さ3.3m、15c末～16cの型式。庚申塔：天和元年銘、笠付方柱形、青面金剛像線刻。
49	四方寄六地藏附庚申塔	中世・近世	中世：逆修板碑、大永5年銘、阿弥陀如来線刻。
50	四方寄御馬下遺跡	縄文・中世	阿蘇氏家臣西牟田氏の居城と伝わる。
51	城ヶ辻城跡	中世	縄文：後期主体。古墳：中期の竪穴住居。中世：妙見城跡は鹿子木氏の出城と伝わる。「城床」の小名あり。
52	妙見遺跡群 ※妙見遺跡・妙見城跡	縄文・古墳・中世	2基確認。
53	今熊横穴群	古墳	古墳：石棺墓(須恵器出土)。
54	袖ノ木遺跡	縄文・古墳	弥生：石棺から広形銅矛出土。中世：逆修板碑、大永44年銘、釈迦如来線刻。
55	川東遺跡群 ※川東遺跡・庄遺跡・川東八鉾神社遺跡	縄文・弥生・中世	逆修板碑、大永3年銘。
56	三宝塚板碑	中世	
57	皮籠石遺跡	縄文・弥生	
58	五丁中原遺跡群 ※五丁中原遺跡・赤水A遺跡・赤水B遺跡	旧石器・縄文・弥生・古墳・古代・中世	旧石器：オスカイ小製尖頭器出土。縄文：早期の炉穴・集石、後晩期の竪穴住居・埋設土器。線刻の有孔土製品出土。弥生：中後期の鰐棺。後期の縄文の環状環壕集落。竪穴住居83軒、大形掘立柱建物(物見槽か)。巴形銅器・小形仿製鏡・銅鏃出土。古墳：4c～5cの円墳・方形周溝墓群22基。主体部は削平。大形円墳3基、最大は周溝径45m。古代：竪穴住居(9c前半)・掘立柱建物。中世：掘立柱建物。逆修板碑4基。享禄4年銘。大永8年銘、地藏菩薩線刻。天文4年銘、阿弥陀如来線刻。天文4年銘、地藏菩薩線刻。
59	赤水城跡	中世	鹿子木寂心家臣、岩崎恵林の居城と伝わる。
60	崩平横穴群	古墳	2基確認。1号は6c中葉の型式(当該地域最古)。
61	一丁畑横穴群	古墳	1基確認。
62	鶴畑古墳参考地	古墳	須恵器片採集。
63	山川窯跡群	古代	1基確認。墓室内より須恵器壺出土。
64	豆尾横穴群	古墳	縄文：後晩期の竪穴住居。弥生：後期の竪穴住居(円墳)は直径約50m、5c中葉の首長墳。5c中～後半の方形周溝墓群。古代：8c後半～9cの竪穴住居・掘立柱建物・小規模道路。中世：堀・土塁。
65	飛田遺跡群 ※飛田路の木遺跡・飛田上原遺跡・飛田山塚古墳	旧石器・縄文・古墳・古代・中世	

2. 歴史的環境

周辺における近世以前の遺跡・文化財等については第2図・第1表をもって記すこととし、本節では、西南戦争関係資料について述べる。

a. 概要（第3～5図、第2表）

熊本市植木町と隣接する玉名郡玉東町は、野戦の緒戦となった「向坂・木葉の戦い」（2月22・23日）から、その後の「半高山・吉次峠の戦い」（3月3日～4月1日）、「田原坂の戦い」（3月4～20日）、「木留・植木方面の戦い」（3月20日～4月15日）など、西南戦争における初期の戦場となった。

戦いは、行軍・兵站の利便性から当時の主要三道、豊前街道・三池往還・吉次往還沿いとその周辺において展開された。「向坂・木葉の戦い」は、陸路北進する薩摩軍を政府軍旅団が迎え撃った遭遇戦、2月25～27日の「高瀬の戦い」後の「半高山・吉次峠の戦い」と「田原坂の戦い」は、熊本城（熊本鎮台）救援のために南下する政府軍旅団とこれを阻止せんとして要害・構築陣地に拠る薩摩軍との攻防戦である。「木留・植木方面の戦い」は、田原坂陥落の同20日、熊本城を目指して豊前街道を南進する政府軍旅団と薩摩軍とが再び向坂において遭遇した戦いを端緒として、その後、八代方面から侵攻する衝背軍（政府軍別働旅団）によって熊本城が開放されるまでの間、東西に長く展開する薩摩軍と政府軍旅団との膠着した戦いである。薩摩軍は、熊本城包囲が解かれたことで南方からも侵攻を受けて挟撃されることを恐れ、戦線を維持することが困難となって本地域から撤退する。これによって、陸路熊本を制して東京を目指すという当初の戦略は崩れることになる。

周辺の西南戦争資料は、主に上記の戦いに関わるものである。陣地跡・塹壕跡・濃密な銃砲弾や薬莖の散布・弾痕など戦場を示すものの他、戦場後方の政薩両軍の本営・繙帯所（病院）跡、さらには戦後に整備・造立された墓地、慰霊碑・顕彰碑・詩碑などの記念碑があり、その種類は多様でかつ数多い。このことは、広域かつ長期に戦場となり、また、それによって戦い全体の帰趨に大きく関わったという、西南戦争における当該地域の特徴や重要性を反映したものと見える。

第2表 周辺の西南戦争関連資料一覧表

※No.は第3図に対応。名称は通称。

No.	名称	No.	名称
1	二俣瓜生田官軍砲台跡 ※四斤山砲の轍、摩擦管検出。	20	河原立薩摩軍墓地・慰霊碑 ※平成4年造。
2	官軍本営出張所跡 ※石積に弾痕。	21	山縣有朋歌碑
3	二俣古閑官軍砲台跡 ※摩擦管検出。	22	辺田野熊野座神社 ※乃木希典詩碑。社殿に弾痕。
4	薩摩兵站の地	23	熊本隊本営跡(標柱) ※近くの石祠に弾痕。
5	横平山公園(横平山戦跡) ※陣地遺構検出。	24	薩摩病院跡(標柱)
6	平原の民家跡 ※柱に小銃弾。	25	薩摩本営跡(標柱)
7	豊岡小学校跡地 ※北平古道戦跡。	26	石塔台場跡 ※近くの墓地の墓石に弾痕。
8	田原の五輪塔 ※弾痕多数。近くの墓地の墓石にも弾痕。	27	山頭遺跡第4次調査地 ※政府軍陣地跡。
9	田原熊野座神社 ※宮ノ前戦跡、社殿・灯笼・樹木等に弾痕・銃砲弾。	28	山頭遺跡第5次調査地 ※薩摩軍陣地跡。
10	谷村計介之碑・西南の役戦没者慰霊碑 ※付近で塹壕検出。	29	薩摩軍荻迫柿木台場跡・薩摩軍美少年の墓
11	弾痕の家(松本家土蔵)跡地	30	荻迫観音 ※石祠に弾痕。
12	薩摩軍舟底砲台跡 ※摩擦管検出。	31	荻迫神社 ※社殿に弾痕・小銃弾。
13	政府軍二ノ坂砲台跡 ※田原坂本道を挟んで政府軍塹壕。	32	乃木大将記念碑(伝千本桜)
14	田原坂公園北側 ※薩摩軍最重要陣地、塹壕検出。大楠に金属反応、周辺墓石に弾痕。崇烈碑(明治13年造)。	33	薩摩軍弾薬庫跡
15	田原坂公園南側 ※段畑を利用した薩摩軍陣地跡。80周年慰霊碑・田原坂西南戦争資料館。	34	植木学校跡 ※指導者が主体となり後に熊本協同隊結成。
16	薩摩軍中久保砲台推定地	35	仁連塔神社 ※社殿に弾痕・小銃弾。
17	薩摩軍七本柿木台場跡・七本薩摩軍墓地・熊本諸隊奮戦地碑	36	そめや旅館跡 ※天井板に弾痕。
18	七本官軍墓地 ※陸軍墓276基・警視隊墓14基・軍夫墓10基。	37	植木天満宮 ※向坂緒戦の地跡。
19	滴水官軍本営跡	38	河原林少尉戦死の地碑
		39	明德官軍墓地(別称 向坂官軍墓地)



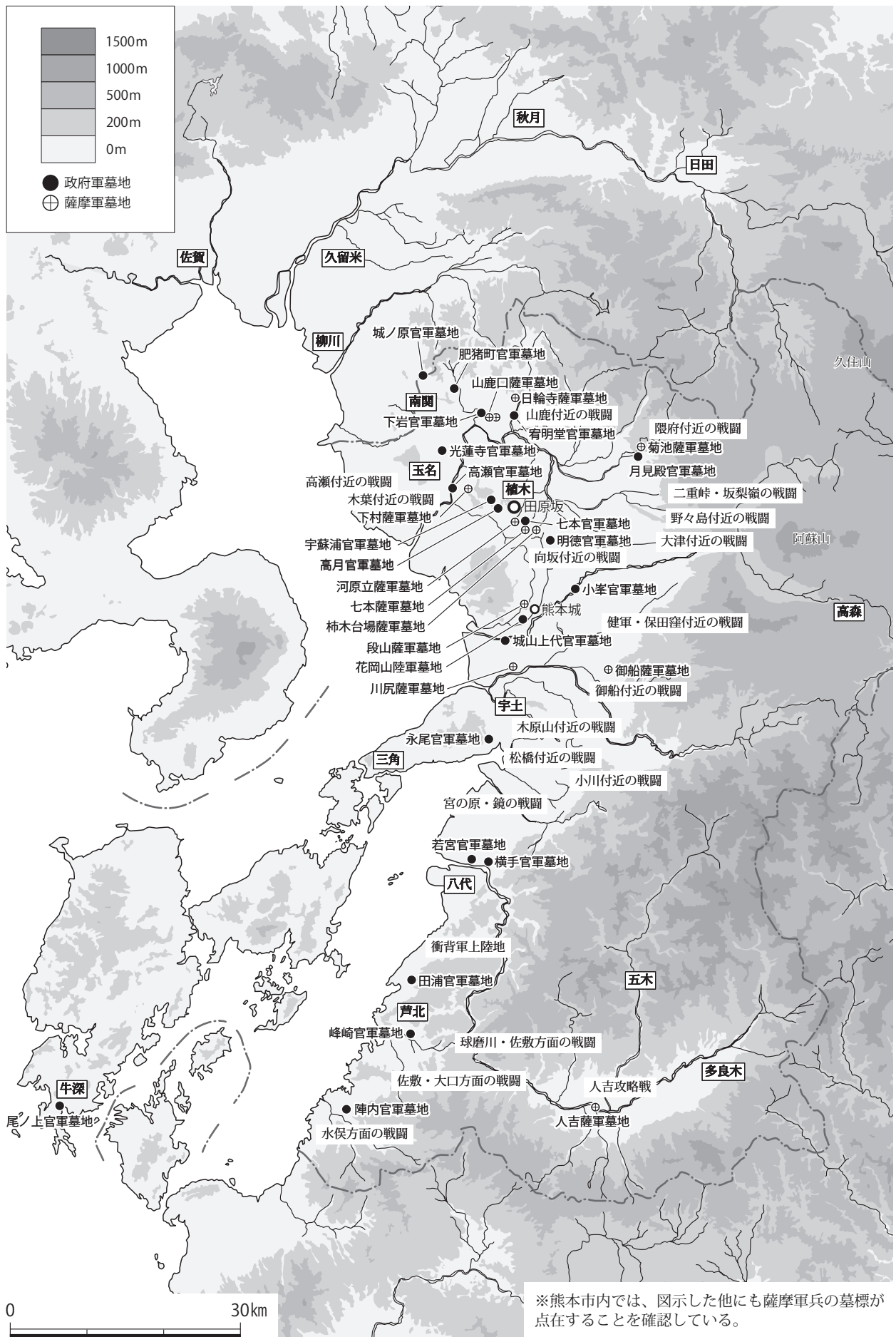
第3図 周辺の西南戦争関連資料分布図 (1/30,000)

※「明治33年測図『二万分之一地形圖熊本近傍九號 植木』大日本帝國陸地測量部」に加筆

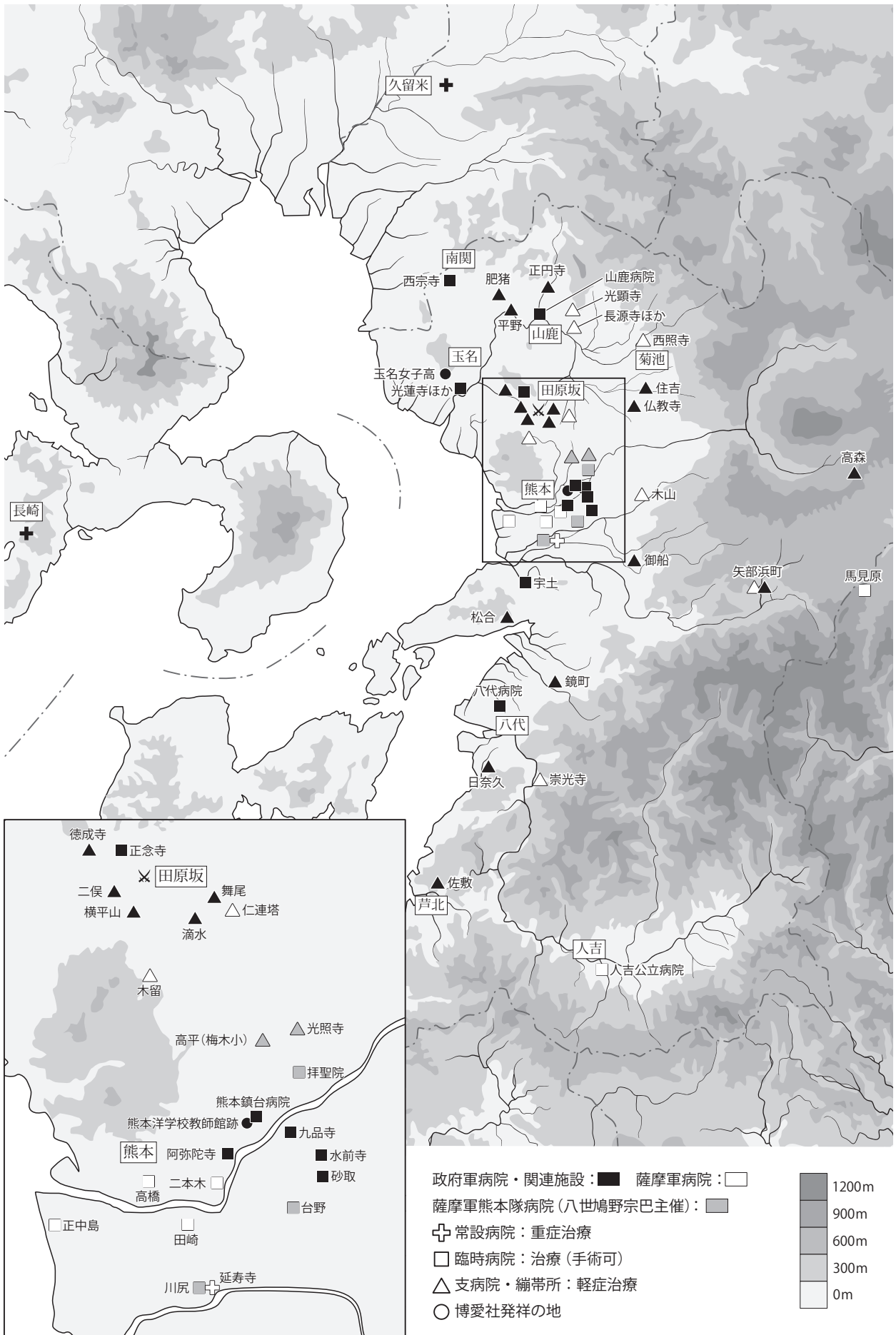
豊前街道：小倉を基点として南関・山鹿・植木を経て熊本城に至る。

三池往還：大牟田から高瀬・田原坂を経て植木で豊前街道に合流する。

吉次往還：高瀬から吉次峠を経て熊本大窪で豊前街道に合流する。 大津道：植木を基点として野々島を経て大津方面へ向かう。



第4図 熊本県内における西南戦争の主な戦闘と関連墓地（縮尺任意）



第5図 熊本県内における西南戦争関連病院（縮尺任意）

b. 西南戦争の墓地（第1・3・4・6図）

周辺における主な墓地について紹介する。

薩摩軍墓地では、七本薩摩墓地・荻迫柿木台場薩摩軍墓地を挙げる。七本薩摩墓地は、戦後、周辺の側溝や畦畔に浅く埋められていた薩摩軍本隊や熊本隊の兵士300名以上の遺体を薩摩軍七本柿木台場跡にまとめて改葬したものである。荻迫柿木台場薩摩軍墓地は、木留・植木方面の戦いにおける薩摩軍台場跡を墓地としたもので、陸軍大臣荒木貞夫が碑文を撰した昭和7年（1932）銘の東野孝之丞（美少年のモデルの一人）の墓石がある。これらの薩摩軍墓地は、明治16年（1883）、七回忌を期した鹿児島県有志による改葬事業により、遺骨の多くは回収されたものとみられる。

政府軍墓地には七本官軍墓地・明德官軍墓地がある。七本官軍墓地は、陸軍軍人276名・警視隊員14名・軍夫10名、計300基の墓石が、概ね所属・階級ごとに並んでいる。墓石の記銘を見ると、戦死日は2月20日から4月20日の2ヶ月間で4月6日・8日のものが多く、戦死地は滴水・木留・植木・荻迫など荻迫柿木台場を巡る戦闘によるものが多く、ともに全体の半数近くを占めている。明德には2箇所の官軍墓地がある。明德上市原官軍墓地と明德寄鶴官軍墓地である（上市原・寄鶴は小字名）。前者は本報告地で県史跡となっており、指定件名に従って明德官軍墓地と称する。寄鶴官軍墓地は、明德官軍墓地から北東約480m、東方に伸びる幅狭な尾根上の北縁に位置する。墓地は南面し、現状で標柱1基、墓石1基がある。標柱は向かって前方右側に立つ。安山岩製、頭部角錐形の角柱で、正面に「明治十年之役戦死者墳墓地」（箱彫り）、背面に「明治廿三年三月建設 熊本縣」（薬研彫り）と刻されている。墓石も安山岩製で、棹石（塔身）は頭部角錐形の角柱、基礎は2段で立方形を呈する。以下、墓石について列記する。

計測値 棹石：幅・奥行とも21.3cm、高さ78.1cm（尖頭部6.0cm、角柱部72.1cm） 基礎上段：幅・奥行とも36.6cm、高さ17.6cm 基礎下段：幅54.8cm、奥行54.2cm、高さ（現状）14.8cm

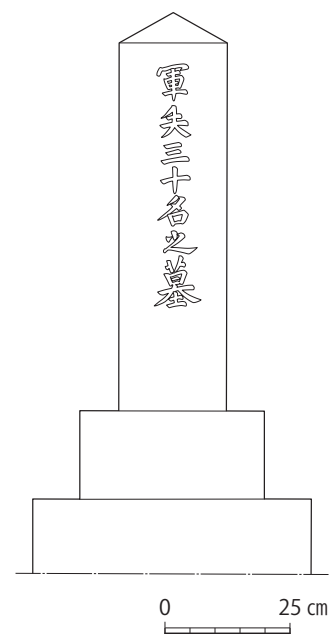
調整 棹石・基礎上段は研磨、基礎下段は研磨が認められず条線状の切断痕が顕著である。

記銘 正面：「軍夫三十名之墓」 向って右側面：「明治十年之役戦死」 向って左：「大正十年再建（改行）熊本縣」 ※全て楷書、薬研彫り。

墓石の周囲、南北8.15m、東西2.20mの範囲には凝灰岩板石と安山岩縁石による敷石が施され、その周囲は、小礫を多く含むコンクリート柱16本とこれを繋ぐ鉄製鎖により区画されている。



寄鶴官軍墓地 左：全景（南から）、右：墓石



第6図 寄鶴官軍墓地
墓石実測図（1/15）

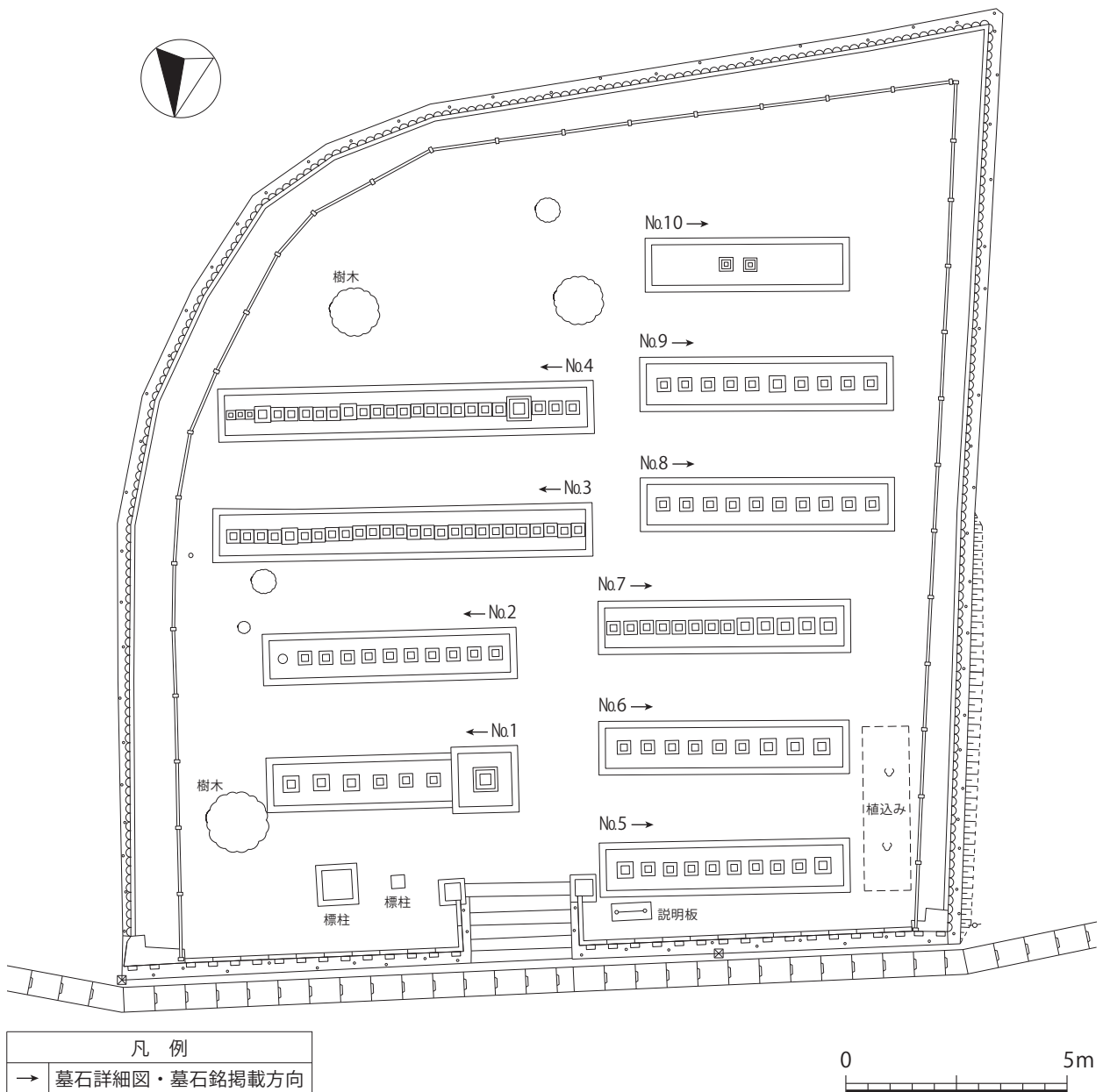
第三章 調査の成果

1. 概要 (第7・8図, 第3表)

本墓地の敷地は、周囲の法面を含め面積約374㎡で、北辺を正面とする。敷地は周囲よりも約1.0～1.4m高く、これは周辺地形から推して少なくとも南東側については盛土したことによると考えられる。

墓地内には、現状で政府陸軍死者122基の墓石が存在し、内訳は尉官墓2基、下士墓17基、兵卒墓98基、軍夫墓5基である。墓石の形状・石材・記銘は、一部例外を除いて、ほぼ統一されている。形状は頭部角錐形角柱の棹石と立方形の基礎で構成されており、階級によって規模が異なる。石材は安山岩製である。記銘は棹石の4面にあり、正面に階級・姓名・「之墓」、右側面(向って右)に所属、左側面(向って左)に戦死日・戦死地、背面に出身地・籍が刻されている。

墓石は、東西に長い区画内ごとに全て北面して並ぶ。この区画は、平面長方形の安山岩切石を組んだ縁石により画されており、東側に4列(No.1～4列)、西側に6列(No.5～10列)あって、それぞれがほぼ



第7図 明德官軍墓地全体図 (1/150)



敷地内全景（北西から）



敷地内全景（北東から）



敷地内全景（南東から）



No.1-1 中尉中尾浩蔵墓の区画



明治 23 年銘の標柱

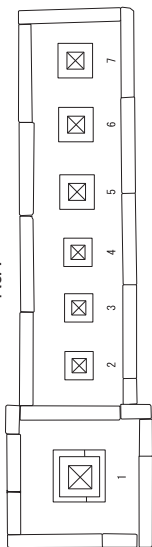


熊本県史跡指定の標柱

平行して配置されている。このうち、No.1 列には本墓地内における最上位の階級である中尉中尾浩蔵墓があり、これについてのみ約 1.5 m 四方の独立した小区画が設けられている。階層性を示すものであるが、その他の区画や墓石の配置については、階級によって区域を明確に分けるといった措置は認められない。

墓地の入り口付近東側（向って左側）には 2 本の安山岩製の標柱が立つ。このうち、東側は尖頭角柱で、正面に「明治十年之役戦死者墳墓地」（箱彫り）、背面に「明治廿三年三月建設 熊本縣」（薬研彫り）と刻されている。同様の標柱は県内の官軍墓地にほぼ共通して認められ、明治 24 年銘のものもある。西側は上面が平坦の角柱形で、正面「熊本県指定史跡 明德官軍墓地」、向って右面「昭和五十二年十月十一日指定」、向って左面「昭和五十三年六月十日建設」、背面「熊本県教育委員会」と刻されている。

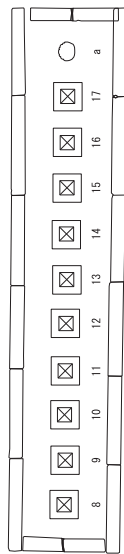
No.1



1	陸軍中尉正八位中	尾浩藏之墓
2	陸軍兵卒	南和五郎之墓
3	陸軍兵卒	古賀勤太郎之墓
4	陸軍兵卒	裕繁三郎之墓
5	陸軍軍曹	前田織松之墓
6	陸軍軍曹	藤葉熊之助之墓
7	陸軍軍曹	柳生一馬之墓

墓 碑 銘 NO.1

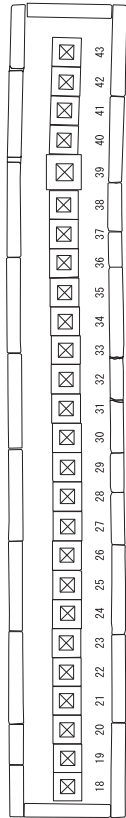
No.2



a	凝灰岩製地蔵立像	
8	陸軍兵卒	河野比佐吉之墓
9	陸軍兵卒	林眞男之墓
10	陸軍兵卒	藤本吟治之墓
11	陸軍兵卒	美間田壽智進之墓
12	陸軍兵卒	西脇正次郎之墓
13	陸軍兵卒	坂谷勝三郎之墓
14	陸軍兵卒	山東久五郎之墓
15	陸軍兵卒	石原好忠之墓
16	陸軍兵卒	河崎與次郎之墓
17	陸軍兵卒	田井市兵衛之墓

墓 碑 銘 NO.2

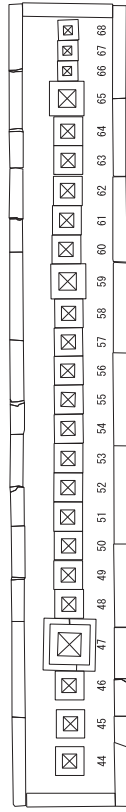
No.3



18	陸軍兵卒	大槻龜藏之墓
19	陸軍兵卒	表金藏之墓
20	陸軍兵卒	保木直一郎之墓
21	陸軍兵卒	藤田丑之助之墓
22	陸軍兵卒	百瀬福松之墓
23	陸軍兵卒	村重隆次郎之墓
24	陸軍兵卒	藤木幸八之墓
25	陸軍兵卒	谷本秋太郎之墓
26	陸軍兵卒	山本熊吉之墓
27	陸軍兵卒	大谷高太郎之墓
28	陸軍兵卒	石川三平之墓
29	陸軍兵卒	富山半七之墓
30	陸軍兵卒	赤尾勇吉之墓
31	陸軍兵卒	星野豊次郎之墓
32	陸軍兵卒	小嶋留次郎之墓
33	陸軍兵卒	齋藤常吉之墓
34	陸軍兵卒	菅間辰五郎之墓
35	陸軍兵卒	内野玄吾之墓
36	陸軍兵卒	森川金藏之墓
37	陸軍兵卒	菅藤重五郎之墓
38	陸軍兵卒	中田寛十郎之墓
39	陸軍伍長	中嶋成俊之墓
40	陸軍兵卒	大越勇藏之墓
41	陸軍兵卒	岡村新吉之墓
42	陸軍兵卒	吉田友作之墓
43	陸軍兵卒	長沢米太郎之墓

墓 碑 銘 NO.3

No.4



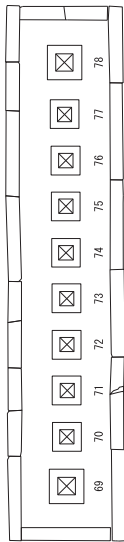
44	陸軍兵卒	松井寅吉之墓
45	陸軍兵卒	小野常藏之墓
46	陸軍兵卒	山田清助之墓
47	陸軍少尉正八位	稲木正雄之墓
48	陸軍兵卒	相田馬藏之墓
49	陸軍兵卒	加藤開藏之墓
50	陸軍兵卒	中村真吉之墓
51	陸軍兵卒	小田切佳章之墓
52	陸軍兵卒	渡邊末吉之墓
53	陸軍兵卒	吉田寅吉之墓
54	陸軍兵卒	森彦八之墓
55	陸軍兵卒	瀧田忠茂之墓
56	陸軍兵卒	鈴木栄太郎之墓
57	陸軍兵卒	西村常次之墓
58	陸軍兵卒	隅田武藏之墓
59	陸軍伍長	杉原恒太郎之墓
60	陸軍兵卒	石橋七五三之墓
61	陸軍兵卒	吉村嘉三郎之墓
62	陸軍兵卒	宮畑村吉之墓
63	陸軍兵卒	楠瀬松太郎之墓
64	陸軍兵卒	高橋栄之助之墓
65	陸軍軍曹	佐々木和太郎之墓
66	軍	夫吉川安平之墓
67	軍	夫坂本忠作之墓
68	軍	夫光崎用八之墓

墓 碑 銘 NO.4



第8図-1 墓石詳細平面図 (1/80)

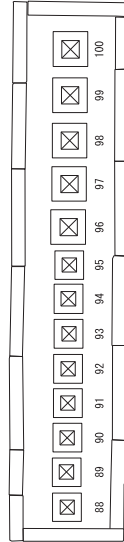
No.5



69	陸軍	伍長	本多	時之藏
70	陸軍	兵卒	三藏	猪之吉之藏
71	陸軍	兵卒	岸上	豐次之藏
72	陸軍	兵卒	前田	熊吉之藏
73	陸軍	兵卒	栗原	具綱之藏
74	陸軍	兵卒	酒井	房綱之藏
75	陸軍	兵卒	佐藤	蕃助之藏
76	陸軍	兵卒	前田	高藏之藏
77	陸軍	兵卒	中嶋	力藏之藏
78	陸軍	軍曹	上田	員一之藏

墓 碑 銘 NO.5

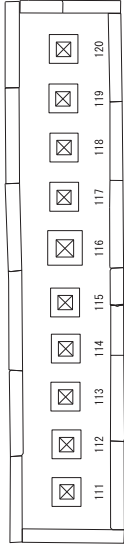
No.7



88	陸軍	兵卒	鳥居	衛門之藏
89	陸軍	兵卒	村岡	奎太郎之藏
90	陸軍	兵卒	山本	伊吉之藏
91	陸軍	兵卒	中本	真次郎之藏
92	陸軍	兵卒	待場	慶次郎之藏
93	陸軍	兵卒	山口	惟行之藏
94	陸軍	兵卒	梅實	力藏之藏
95	陸軍	兵卒	坂本	茂八郎之藏
96	陸軍	伍長	龜井	島造之藏
97	陸軍	伍長	淵本	直夫之藏
98	陸軍	伍長	秋浦	雅輝之藏
99	陸軍	伍長	中島	九輔之藏
100	陸軍	伍長	北島	社多之藏

墓 碑 銘 NO.7

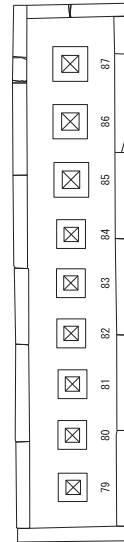
No.9



111	陸軍	兵卒	角梅	太郎之藏
112	陸軍	兵卒	西村	勘五郎之藏
113	陸軍	兵卒	宮崎	鉄藏之藏
114	陸軍	兵卒	大西	利三郎之藏
115	陸軍	兵卒	大石	瀬倉藏之藏
116	陸軍	軍曹	田中	盛次之藏
117	陸軍	兵卒	小川	健次郎之藏
118	陸軍	兵卒	薄田	吉五郎之藏
119	陸軍	兵卒	金子	卯吉之藏
120	陸軍	兵卒	宮下	惣藏之藏

墓 碑 銘 NO.9

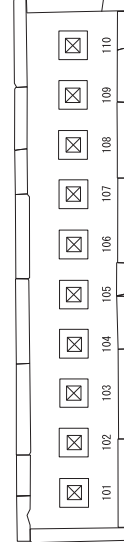
No.6



79	陸軍	兵卒	上野	安藏之藏
80	陸軍	兵卒	山口	市十郎之藏
81	陸軍	兵卒	江川	熊吉之藏
82	陸軍	兵卒	佐藤	前吉之藏
83	陸軍	兵卒	田洲	庄太郎之藏
84	陸軍	兵卒	富田	士佐助之藏
85	陸軍	軍曹	長谷	部保親之藏
86	陸軍	伍長	太田	正勝之藏
87	陸軍	伍長	太田	信男之藏

墓 碑 銘 NO.6

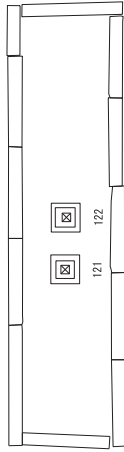
No.8



101	陸軍	兵卒	井上	音市之藏
102	陸軍	兵卒	寺井	與十郎之藏
103	陸軍	兵卒	白井	重代太郎之藏
104	陸軍	兵卒	中谷	内音松之藏
105	陸軍	兵卒	笹島	要次郎之藏
106	陸軍	兵卒	加藤	光藏之藏
107	陸軍	兵卒	岩崎	常五郎之藏
108	陸軍	兵卒	前田	弥八之藏
109	陸軍	喇叭	中田	平三郎之藏
110	陸軍	兵卒	山崎	作藏之藏

墓 碑 銘 NO.8

No.10



121	陸軍	夫	梅田	久四郎之藏
122	陸軍	夫	宮原	卯三郎之藏

墓 碑 銘 NO.10



第 8 図-2 墓石詳細平面図 (1 / 80)

29	大近衛衛兵第四中隊第二聯隊第2	肥後国山本郡向坂	於戰死	岡山縣備前国津高郡今圖	陸軍兵卒	富山半七之墓
28	大近衛衛兵第四中隊第二聯隊第2	肥後国山本郡向坂	於戰死	津長野村平民	陸軍兵卒	石川三平之墓
27	大近衛衛兵第四中隊第二聯隊第2	肥後国山本郡向坂	於戰死	浦平縣伊豫国宇和郡大	陸軍兵卒	大谷高太郎之墓
26	大近衛衛兵第四中隊第二聯隊第2	肥後国山本郡向坂	於戰死	村山縣周防国都濃郡夜市	陸軍兵卒	山本熊吉之墓
25	大近衛衛兵第四中隊第二聯隊第2	肥後国山本郡向坂	於戰死	愛媛縣讚岐国三木郡(欠矢)	陸軍兵卒	谷本秋太郎之墓
24	大近衛衛兵第四中隊第二聯隊第2	肥後国山本郡向坂	於戰死	兵庫縣播磨国佐用郡西	陸軍兵卒	藤木幸八之墓
23	大近衛衛兵第四中隊第二聯隊第2	肥後国山本郡向坂	於戰死	山口縣周防国玖珂郡玖珂村	陸軍兵卒	村重磯次郎之墓
22	大近衛衛兵第四中隊第二聯隊第2	肥後国山本郡向坂	於戰死	石川縣能登国鳳到郡内山	陸軍兵卒	百萬福松之墓
21	大近衛衛兵第四中隊第二聯隊第2	肥後国山本郡向坂	於戰死	阿波郡府山城紀伊郡伏見	陸軍兵卒	藤田丑之助之墓
20	大近衛衛兵第四中隊第二聯隊第2	肥後国山本郡向坂	於戰死	愛媛縣伊豫国宇和郡元	陸軍兵卒	保木直一郎之墓
19	大近衛衛兵第四中隊第二聯隊第2	肥後国山本郡向坂	於戰死	石川縣越中国砺波郡境	陸軍兵卒	表金藏之墓
18	大近衛衛兵第四中隊第二聯隊第2	肥後国山本郡向坂	於戰死	京都府丹波国天田郡三俣	陸軍兵卒	大槻亀藏之墓
番号	墓石の右側面	同左側面		同背面		同正面

No. 3 列 26 墓

17	大近衛衛兵第四中隊第二聯隊第2	肥後国山本郡向坂	於戰死	石川縣加賀国石川郡天神	陸軍兵卒	田井市兵衛之墓
16	大近衛衛兵第四中隊第二聯隊第2	肥後国山本郡向坂	於戰死	三重縣伊賀国阿拜郡御代	陸軍兵卒	河崎興次郎之墓
15	大近衛衛兵第四中隊第二聯隊第2	肥後国山本郡向坂	於戰死	三重縣伊勢国桑名郡桑名	陸軍兵卒	石原好忠之墓
14	大近衛衛兵第四中隊第二聯隊第2	肥後国山本郡向坂	於戰死	島根縣因幡国八東郡山路	陸軍兵卒	山東久五郎之墓
13	大近衛衛兵第四中隊第二聯隊第2	肥後国山本郡向坂	於戰死	島根縣因幡国邑美郡鳥取	陸軍兵卒	坂谷勝三郎之墓
12	大近衛衛兵第四中隊第二聯隊第2	肥後国山本郡向坂	於戰死	福和山縣尾伊国名草郡今	陸軍兵卒	西脇正次郎之墓
11	大近衛衛兵第四中隊第二聯隊第2	肥後国山本郡向坂	於戰死	舟越縣伯耆国日野郡	陸軍兵卒	美間田壽賀造之墓
10	大近衛衛兵第四中隊第二聯隊第2	肥後国山本郡向坂	於戰死	三重縣伊勢国鳳辨郡平古	陸軍兵卒	藤本吟治之墓
9	大近衛衛兵第四中隊第二聯隊第2	肥後国山本郡向坂	於戰死	山形縣羽前国置賜郡米沢	陸軍兵卒	林薫男之墓
8	大近衛衛兵第四中隊第二聯隊第2	肥後国山本郡向坂	於戰死	山口縣長門国美祿郡大嶺村	陸軍兵卒	河野比佐吉之墓
番号	墓石の右側面	同左側面		同背面		同正面

No. 2 列 10 墓

7	大近衛衛兵第四中隊第二聯隊第2	肥後国山本郡向坂	於戰死	愛知縣尾張国愛知郡廣井	陸軍軍曹	柳生一馬之墓
6	大近衛衛兵第四中隊第二聯隊第2	肥後国山本郡向坂	於戰死	三重縣伊勢国一志郡須賀村	陸軍軍曹	脇栗熊之助之墓
5	大近衛衛兵第四中隊第二聯隊第2	肥後国山本郡向坂	於戰死	和歌(一部破損)山縣尾伊国名草郡新	陸軍軍曹	前田梶松之墓
4	(旧記録) 大坂鎮台兵第八連隊第二中隊陸軍兵卒齋藤三郎之墓 明治十年三月十一日於肥後本県下肥後国吾妻郡原坂戰死和歌山縣尾伊国伊都郡下中村平民					
4	大坂鎮台兵第八中隊(復元碑)	明治十年三月十一日於肥後	(記録無し)		陸軍兵卒	齋藤三郎之墓
3	第熊本鎮臺兵第十四聯隊	肥後国合志郡野々	於戰死	福岡縣筑後国上妻郡熊野	陸軍兵卒	古賀勳太郎之墓
2	第熊本鎮臺兵第十四聯隊	肥後国合志郡野々	於戰死	四小嶺縣肥前国第二十九大區	陸軍兵卒	南和五郎之墓
1	第熊本鎮臺兵第十四聯隊	肥後国合志郡野々	於戰死	山口縣周防国吉敷郡山口水	陸軍中尉正八位	中尾浩藏之墓
番号	墓石の右側面	同左側面		同背面		同正面

No. 1 列 7 墓

- ・アミカケ文字は「異字」(第5表を参照のこと)
- ・改行は実物の記銘に同じ(4・123の旧記録を除く)

第3表-1 明德官軍墓地 墓石銘一覽表

64	蕨大坂三鎮臺兵第八聯隊 大隊臺兵第二中隊	明治十年三月十四日於熊本縣下 肥後國玉名郡二侯戰死	京都府山城國何麻郡建 田村平民	陸軍兵卒	高橋榮之助之墓
63	蕨大坂三鎮臺兵第八聯隊 大隊臺兵第二中隊	明治十年三月十四日於熊本縣下 肥後國玉名郡二侯戰死	村和歌山縣紀伊國海部郡中 平縣	陸軍兵卒	楠瀬松太郎之墓
62	蕨大坂三鎮臺兵第八聯隊 大隊臺兵第四中隊	明治十年三月十四日於熊本縣下 肥後國玉名郡二侯戰死	下岡山縣美作國久米南條郡 下野村平民	陸軍兵卒	宮畑村吉之墓
61	蕨大坂三鎮臺兵第八聯隊 大隊臺兵第二中隊	明治十年三月十四日於熊本縣下 肥後國玉名郡二侯戰死	堺縣大和國山邊郡中足 村平民	陸軍兵卒	吉村嘉三郎之墓
60	蕨熊本三鎮臺兵第十四聯隊 大隊臺兵一中隊	明治十年三月十七日於熊本縣下 肥後國山本郡種木戰死	門長崎縣西區二小區中本 村平民	陸軍兵卒	石橋七五三吉之墓
59	蕨近衛臺兵第二聯隊第二大 隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	熊本縣肥後國肥後郡京町士族	陸軍伍長	杉原恒太郎之墓
58	蕨近衛臺兵第二聯隊第二大 隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	高知縣土佐國長岡郡野田村 平民	陸軍兵卒	隅田武藏之墓
57	蕨近衛臺兵第二聯隊第二大 隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	熊本縣肥後國肥後郡上南部村 士族	陸軍兵卒	西村常次之墓
56	蕨近衛臺兵第二聯隊第二大 隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	千葉縣安房國平郡岡本村 平民	陸軍兵卒	齋木榮太郎之墓
55	蕨近衛臺兵第二聯隊第一大 隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	山崎長岡縣因幡國邑美郡田ノ駕 平民	陸軍兵卒	濱田忠茂之墓
54	蕨近衛臺兵第二聯隊第一大 隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	岡山縣備前國小嶋郡嶺生村 平民	陸軍兵卒	森彦八之墓
53	蕨近衛臺兵第二聯隊第一大 隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	福島縣岩代國白川郡二子塚村 平民	陸軍兵卒	吉田實吉之墓
52	蕨近衛臺兵第二聯隊第一大 隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	平岐阜縣美濃國鴨郡稻口村 平民	陸軍兵卒	渡邊末吉之墓
51	蕨近衛臺兵第二聯隊第一大 隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	山形縣羽前國置賜郡米澤士族	陸軍兵卒	小田切佳章之墓
50	蕨熊本鎮臺砲兵第六大隊第一小 隊	明治十年四月廿日於熊本縣下 肥後國肥後郡健軍村戰死	福岡縣筑前國津村第五大區 小區今津村平民	陸軍兵卒	中村實吉之墓
49	蕨近衛臺兵第二聯隊第一大 隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	平愛知縣三河國幡豆郡上町村 平民	陸軍兵卒	加藤閑藏之墓
48	蕨東京三鎮臺兵第一聯隊 大隊臺兵第四中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡種木戰死	谷崎村平民 武藏國新座郡下保	陸軍兵卒	相田馬藏之墓
47	蕨近衛臺兵第二聯隊第一大 隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	京都府丹波國船井郡 岡部士族	陸軍少尉正八位	稻本正雄之墓
46	蕨廣嶋鎮臺兵第十一聯隊 大隊臺兵一中隊	明治十年四月廿日於熊本縣下 肥後國詫摩郡保田窪戰死	方廣嶋縣安藝國豊田郡南 村平民	陸軍兵卒	山田清助之墓
45	蕨廣嶋鎮臺兵第十一聯隊 大隊臺兵一中隊	明治十年四月廿日於熊本縣下 肥後國詫摩郡保田窪戰死	岡山縣備中國下道郡川邊 村平民	陸軍兵卒	小野常藏之墓
44	蕨廣嶋鎮臺兵第十一聯隊 大隊臺兵一中隊	明治十年四月廿日於熊本縣下 肥後國詫摩郡保田窪戰死	村山口縣周防國熊毛郡室積 村平民	陸軍兵卒	松井實吉之墓
番号	墓石の右側面	同左側面	同背面	同正面	

No. 4 列 25 墓

43	蕨東京三鎮臺兵第三聯隊 大隊臺兵第二中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	長野縣信濃國第十六大區 一小區西尾村平民	陸軍兵卒	長沢末太郎之墓
42	蕨東京三鎮臺兵第三聯隊 大隊臺兵第二中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	嶋野村平民 信濃國更級郡下真	陸軍兵卒	吉田友作之墓
41	蕨東京三鎮臺兵第三聯隊 大隊臺兵第二中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	村平縣下野國都賀郡丸林 平民	陸軍兵卒	岡村新吉之墓
40	蕨東京三鎮臺兵第三聯隊 大隊臺兵第二中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	井木縣下野國都賀郡小金 村平民	陸軍兵卒	大越房藏之墓
39	蕨東京三鎮臺兵第三聯隊 大隊臺兵第二中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	新田縣越後國蒲原郡新 田士族	陸軍伍長	中嶋成俊之墓
38	蕨東京三鎮臺兵第一聯隊 大隊臺兵第二中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	東京府第八大區四小區下 石塚村士族	陸軍兵卒	中田寛十郎之墓
37	蕨東京三鎮臺兵第一聯隊 大隊臺兵第二中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	萩縣平八區六小區上 窪村平民	陸軍兵卒	當磨重五郎之墓
36	蕨東京三鎮臺兵第一聯隊 大隊臺兵第二中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	東京府第十大區四小區下 住沼北組平民	陸軍兵卒	森川金藏之墓
35	蕨東京三鎮臺兵第一聯隊 大隊臺兵第四中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	神奈川縣武藏國多摩郡 久保村平民	陸軍兵卒	内野玄吉之墓
34	蕨東京三鎮臺兵第一聯隊 大隊臺兵第四中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	神奈川縣武藏國多摩郡 沼田平民	陸軍兵卒	當間辰五郎之墓
33	蕨東京三鎮臺兵第一聯隊 大隊臺兵第四中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	小神奈川縣武藏國橘樹郡 向村平民	陸軍兵卒	藤常吉之墓
32	蕨東京三鎮臺兵第一聯隊第一 大隊臺兵第三中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	神奈川縣相模國第十五大 區堀内村平民	陸軍兵卒	小峰留次郎之墓
31	蕨近衛臺兵第二聯隊第一大 隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	神奈川縣相模國足柄郡敷 泉村平民	陸軍兵卒	星野豊次郎之墓
30	蕨近衛臺兵第二聯隊第一大 隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	兵庫縣丹波國飾東郡宇 佐崎村平民	陸軍兵卒	赤尾勇吉之墓

第3表-2 明德官軍墓地 墓石銘一覽表

95	大近衛衛兵第二聯隊第二中隊	肥後國山本郡向坂	明治十年三月廿日	於熊本縣下	坂村根士族因幡國邑美郡濱	陸軍兵卒	坂本茂八郎之墓
94	大近衛衛兵第二聯隊第二中隊	肥後國山本郡向坂	明治十年三月廿日	於熊本縣下	中島根平伯耆國久米郡下田	陸軍兵卒	梅實力藏之墓
93	大近衛衛兵第二聯隊第二中隊	肥後國山本郡向坂	明治十年三月廿日	於熊本縣下	和歌山縣紀伊國有田郡中原	陸軍兵卒	山口權行之墓
92	大近衛衛兵第二聯隊第二中隊	肥後國山本郡向坂	明治十年三月廿日	於熊本縣下	兵庫縣丹波國水上郡金	陸軍兵卒	待場慶次郎之墓
91	大近衛衛兵第二聯隊第二中隊	肥後國山本郡向坂	明治十年三月廿日	於熊本縣下	石川縣越前國禮波郡赤丸	陸軍兵卒	中本實次郎之墓
90	大近衛衛兵第二聯隊第二中隊	肥後國山本郡向坂	明治十年三月廿日	於熊本縣下	石川縣越前國射水郡論田	陸軍兵卒	山本伊吉之墓
89	大近衛衛兵第二聯隊第二中隊	肥後國山本郡向坂	明治十年三月廿日	於熊本縣下	熊本縣肥後國託麻郡下南	陸軍兵卒	村岡奎太郎之墓
88	大近衛衛兵第二聯隊第二中隊	肥後國山本郡向坂	明治十年三月廿日	於熊本縣下	福岡縣筑城國菊田郡小濱	陸軍兵卒	鳥居衛門之墓
墓石の右側面	同左側面	同背面	同正面				

No. 7 列 13 墓

87	大近衛衛兵第二聯隊第二中隊	肥後國山本郡向坂	明治十年三月廿日	於熊本縣下	島根縣因幡國邑美郡片原町	陸軍伍長	大田信男之墓
86	大近衛衛兵第二聯隊第二中隊	肥後國山本郡向坂	明治十年三月廿日	於熊本縣下	石川縣加賀國石川郡金澤	陸軍伍長	大田正勝之墓
85	熊本鎮臺第一中隊	肥後國山本郡向坂	明治十年三月廿日	於熊本縣下	浦高知縣阿波國名東郡富田	陸軍軍曹	長谷部保親之墓
84	熊本鎮臺第一中隊	肥後國山本郡向坂	明治十年三月廿日	於熊本縣下	長崎縣肥前郡第二十二大區	陸軍兵卒	富士佐助之墓
83	熊本鎮臺第一中隊	肥後國山本郡向坂	明治十年三月廿日	於熊本縣下	長崎縣肥前郡廿六大區山口	陸軍兵卒	田淵庄太郎之墓
82	熊本鎮臺第一中隊	肥後國山本郡向坂	明治十年三月廿日	於熊本縣下	福岡縣肥前國筑城郡推	陸軍兵卒	佐藤前吉之墓
81	大坂鎮臺第一中隊	肥後國山本郡向坂	明治十年三月廿日	於熊本縣下	大分縣豐後國第八大區七	陸軍兵卒	江川熊吉之墓
80	熊本鎮臺第一中隊	肥後國山本郡向坂	明治十年三月廿日	於熊本縣下	長崎縣肥前郡廿八大區	陸軍兵卒	山口市十郎之墓
79	熊本鎮臺第一中隊	肥後國山本郡向坂	明治十年三月廿日	於熊本縣下	大分縣豐後國第八大區十四	陸軍兵卒	上野安藏之墓
番号	墓石の右側面	同左側面	同背面	同正面			

No. 6 列 9 墓

78	大近衛衛兵第二聯隊第二中隊	肥後國山本郡向坂	明治十年三月廿日	於熊本縣下	和歌山縣紀伊國伊都郡中嶋	陸軍軍曹	上田眞一之墓
77	大近衛衛兵第二聯隊第二中隊	肥後國山本郡向坂	明治十年三月廿日	於熊本縣下	石川縣越前國新川郡八人町	陸軍兵卒	中嶋力藏之墓
76	大近衛衛兵第二聯隊第二中隊	肥後國山本郡向坂	明治十年三月廿日	於熊本縣下	三重縣伊勢國一志郡大郷村	陸軍兵卒	前田高之墓
75	大近衛衛兵第二聯隊第二中隊	肥後國山本郡向坂	明治十年三月廿日	於熊本縣下	岐阜縣美濃國郡上郡島谷	陸軍兵卒	佐藤喜助之墓
74	大近衛衛兵第二聯隊第二中隊	肥後國山本郡向坂	明治十年三月廿日	於熊本縣下	和歌山縣紀伊國名草郡公瀨	陸軍兵卒	酒井房楠之墓
73	大近衛衛兵第二聯隊第二中隊	肥後國山本郡向坂	明治十年三月廿日	於熊本縣下	山形縣羽前國置賜郡五十嵐	陸軍兵卒	栗原昇之墓
72	大近衛衛兵第二聯隊第二中隊	肥後國山本郡向坂	明治十年三月廿日	於熊本縣下	熊本縣下野國安蘇郡本所	陸軍兵卒	前田熊吉之墓
71	大近衛衛兵第二聯隊第二中隊	肥後國山本郡向坂	明治十年三月廿日	於熊本縣下	岐阜縣美濃國石津郡牧田	陸軍兵卒	岸上喜代次之墓
70	大近衛衛兵第二聯隊第二中隊	肥後國山本郡向坂	明治十年三月廿日	於熊本縣下	島根縣伯耆國倉見郡長	陸軍兵卒	三馬猪吉之墓
69	大坂鎮臺第一中隊	肥後國山本郡向坂	明治十年三月廿日	於熊本縣下	宮津郡丹後國興佐郡	陸軍伍長	本多長時之墓
番号	墓石の右側面	同左側面	同背面	同正面			

No. 5 列 10 墓

68	軍團輜重部	肥後國松山	明治十年四月一日	即死	熊本縣肥後國第十二大區	軍	夫光崎用八之墓
67	第三旅團輜重部	肥後國大津口	明治十年四月十六日	即死	熊本縣肥後國合志郡	軍	夫坂本忠權之墓
66	第三旅團輜重部	肥後國大津口	明治十年四月廿日	即死	熊本縣肥後國第六大區	軍	夫吉川安平之墓
65	大坂鎮臺第一中隊	肥後國山本郡向坂	明治十年三月十八日	於熊本縣下	熊本縣肥後國養父郡志度	陸軍軍曹	佐々木和太郎之墓

第3表-3 明徳官軍墓地 墓石銘一覽表

123	(旧記録) 軍団編重部軍夫金子新吉之墓 明治十年三月十七日肥後國熊手即死 福岡県三浦郡西濱武村	123	(現在なし)		
122	福岡県筑後郡井原町	122	福岡県筑後郡井原町	軍団輜部	明治十年三月廿三日肥後國 熊手即死
121	熊本縣第四區新南村	121	熊本縣第四區新南村		明治十年四月四日熊本 松本即死
番号	墓石の右側面		同左側面		同背面
					同正面

No. 10 列 3 墓

120	東京鎮基兵第三聯隊 第二大隊基兵第二中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	新田村平越後國頸城郡坂口	陸軍兵卒	宮下 惣藏之墓
119	東京鎮基兵第三聯隊 第二大隊基兵第二中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	平崎縣武藏國足立郡上谷村	陸軍兵卒	金子 卯吉之墓
118	東京鎮基兵第一聯隊 第一大隊基兵第四中隊	明治十年四月廿一日於熊本縣下 肥後國益城郡河原村戰死	平崎縣武藏國足立郡土呂村	陸軍兵卒	薄田 吉五郎之墓
117	東京鎮基兵第一聯隊 第一大隊基兵第四中隊	明治十年四月廿一日於熊本縣下 肥後國益城郡河原村戰死	平崎縣武藏國足立郡千駄村	陸軍兵卒	小川 健次郎之墓
116	東京鎮基兵第一聯隊 第一大隊基兵第四中隊	明治十年四月廿一日於熊本縣下 肥後國益城郡河原村戰死	島根縣因幡國邑美郡鳥取	陸軍軍曹	田中 盛次之墓
115	大坂鎮基兵第十聯隊 第二大隊第一中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡榎木戰死	兵庫縣摩加古郡高砂町 平民	陸軍兵卒	大石 頼倉藏之墓
114	大坂鎮基兵第十聯隊 第一大隊第一中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡榎木戰死	岡山縣備前國赤坂郡中島村 平民	陸軍兵卒	大西 利三郎之墓
113	大坂鎮基兵第九聯隊 第二大隊基兵第四中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	三重縣第六區一小區 府重	陸軍兵卒	宮崎 鉄藏之墓
112	大坂鎮基兵第九聯隊 第二大隊基兵第四中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	三重縣伊勢國飯野郡御麻生村 平民	陸軍兵卒	西村 勘五郎之墓
111	廣瀨鎮基兵第十一聯隊 第一大隊第一中隊	明治十年四月廿日於熊本縣下 肥後國野原郡保田戰死	東島根縣國意郡下意東村 平民	陸軍兵卒	梅 太郎之墓
番号	墓石の右側面	同左側面	同背面		同正面

No. 9 列 10 墓

110	大近衛基兵第二聯隊 第四中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	新潟縣越後國三浦郡興板町 平民	陸軍兵卒	山崎 作藏之墓
109	大近衛基兵第二聯隊 第四中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	島根縣因幡國邑美郡鳥取 土族	陸軍喇叭卒	中田 平三郎之墓
108	大近衛基兵第二聯隊 第四中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	愛媛縣平岐國香川郡川部村 平民	陸軍兵卒	前田 弥八之墓
107	大近衛基兵第二聯隊 第四中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	群馬縣上野國群馬郡新井村 平民	陸軍兵卒	岩崎 常五郎之墓
106	大近衛基兵第二聯隊 第四中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	高知縣阿波國名西郡天神村 平民	陸軍兵卒	加藤 光藏之墓
105	大近衛基兵第二聯隊 第四中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	野川縣越中國瀨波郡佐賀 平民	陸軍兵卒	樋島 要次郎之墓
104	大近衛基兵第二聯隊 第四中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	石川縣能登國鳳到郡穂成谷 平民	陸軍兵卒	中谷 内音松之墓
103	大近衛基兵第二聯隊 第四中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	長野縣信濃國伊奈郡松尾村 平民	陸軍兵卒	白井 喜代太郎之墓
102	大近衛基兵第二聯隊 第四中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	肥後國山本郡向坂戰死 石川縣加賀國石川郡金沢 土族	陸軍兵卒	寺井 興十郎之墓
101	大近衛基兵第二聯隊 第四中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	兵庫縣播磨國加西郡新家 村平民	陸軍兵卒	井上 音市之墓
番号	墓石の右側面	同左側面	同背面		同正面

No. 8 列 10 墓

100	大近衛基兵第二聯隊 第四中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	石川縣加賀國石川郡金沢 土族	陸軍伍長	北島 桂多之墓
99	大近衛基兵第二聯隊 第四中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	福嶋縣岩代國安八郡一本 松平民	陸軍伍長	中島 九輔之墓
98	大近衛基兵第二聯隊 第四中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	原和歌山縣紀伊國菟草郡井原町 土族	陸軍伍長	秋浦 雅輝之墓
97	大近衛基兵第二聯隊 第四中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	島根縣因幡國邑美郡鳥取 土族	陸軍伍長	淵本 直夫之墓
96	大近衛基兵第二聯隊 第四中隊	明治十年三月廿日於熊本縣下 肥後國山本郡向坂戰死	島根縣伯耆國日野郡下 蚊屋村平民	陸軍伍長	龜井 島造之墓

第3表-4 明徳官軍墓地 墓石銘一覽表

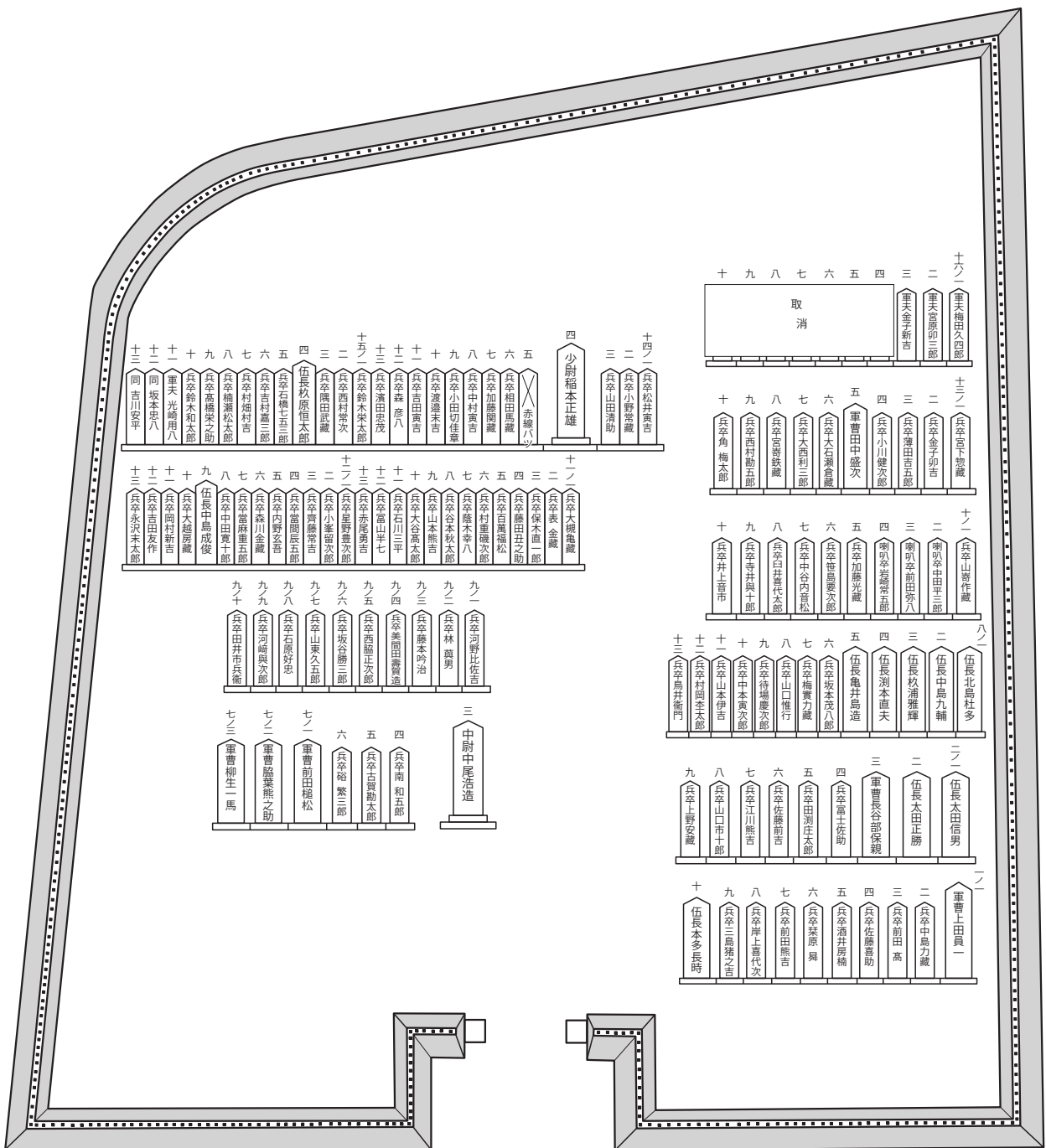
2. 墓地の現状と変更（第7～9図）

本墓地の現況は、明治11年（1878）とされる竣工当時から幾度かの変更を経たものである。

これについて、墓地竣工時に近い明治19年（1886）に作製された熊本県立図書館蔵の配置図（以下「旧配置図」）、本市が所蔵する昭和30年代後半～40年代の撮影とみられる写真（以下「昭和写真」）、北接する道路の拡幅工事から間もない頃、昭和50年頃以前に撮影されたとみられる写真（以下「50年写真」）と現況とを比較し、主な変更点について列記する。

a. 敷地の形状

○ 旧配置図・昭和写真と現況とを比べると、敷地の平面形状はほぼ同じであるが、現況は北側（墓地前面側）が1.5～2mほど狭くなっている。これは北面する道路拡幅に伴う後退によるものとみられる。この工事に伴って、北辺（前面）の壁は昭和写真では土坡であったものがコンクリート擁壁となっている。なお、



第9図 明治19年作製の明德官軍墓地配置図（旧配置図） ※熊本県立図書館所蔵図を模写。



昭和 30・40 年代撮影とみられる写真



昭和 50 年頃以前の撮影

※道路後退に伴って新設した擁壁が真新しく、工事から間もない頃の撮影とみられる。道路は未舗装。



昭和 51 年 11 月撮影（裏書あり）

※左写真と比べて擁壁は汚れ、少なくとも 1 年以上の時間が経過したとみられる。道路は舗装されている。



現在の写真

※昭和 30・40 年代の写真と同じ角度から撮影。



他3面の擁壁は凝灰岩製の間知石積みで、これは建設当時のままの可能性はある（写真①）。

○ 敷地の圍繞施設は、旧配置図では、やや不鮮明な箇所もあるが小さな四角が密に並んでいる。木柵の表現とみられ、類似施設の古写真から推して白く塗られた支柱が並ぶものであった可能性がある。昭和写真では石製の支柱と金属柵で構成されており、型式からみて建設当初から変更されたものと考えられる。50年写真と現況では北辺がコンクリートブロック積みとなっており、これは前述の道路後退に伴うものとみられる。他3面については、50年写真は昭和写真と同じであるが、現況は平成25年度の史跡整備により、擬木柵へと変更されている（写真②）。

○ 階段も道路後退に伴って変更したとみられる。50年写真と現況はコンクリート製であるが、建設当初は石製であったと考えられる。

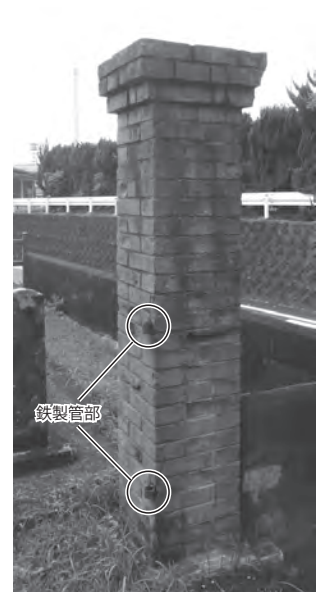
○ 煉瓦積みの門柱には、当初は門扉が取り付けられていたとみられ、側面に丁番の鉄製管部が残存している（写真③）。この門扉は昭和写真でも見られない。木製のため腐植するなどして撤去されたのであろうか。近代までは維持管理されていたはずなので、この撤去は現代になってからと考えられる。また、昭和写真では門柱の上面に尖頭形の頂部が乗っているが、ひび割れており、このためであろうか、50年写真では見られず、除去されたと考えられる。



① 間知石積み擁壁（東面）



② 擬木柵（南面）



③ 煉瓦積みの門柱



④ 区画内モルタル敷き（No.6列）



⑤ No.10列（当初の7基は除外）



⑥ No.2-11 美間田壽賀造墓（復元墓石）



⑦ No.2列の地蔵立像



⑧ No.10-121 梅田久四郎墓

- 明治 23 年（1890）の標柱「明治十年之役戦死者墳墓地」は、50 年写真と現況では入口付近東側（向って左側）にあるが、昭和写真では入口付近西側（向かって右側）にある。この移動も道路後退によるもので、西側前面の空間（No.5 列北側の空間）が狭くなったためと考えられる。
- 50 年写真・現状では墓地の南側・南東側に桜の木があるが、昭和写真には見られない。一方、昭和写真では北西隅に樹木が見られるが、50 年写真・現況には無い。これも道路後退によるものであろうか。以上の変更は、多くは北接する道路の拡幅工事による後退に伴うものとみられる。熊本県指定史跡となった昭和 52 年 10 月以降は、擬木柵への変更と「熊本県指定史跡 明德官軍墓地」標柱や説明板の設置を除いて大きな変更は無いと考えられる。

b. 区画・墓石の配置等

- 墓石が並ぶ東 4 列、西 6 列の区画配置は、旧配置図から変更は無い。区画は縁石により囲まれており、これは昭和写真にも認められる。ただし、現況は区画内が全てモルタル敷きとなっている（写真④）。昭和写真・50 年写真では区画内に草が生えているので、モルタルの敷設はその後のものであろう。
- 旧配置図では、南西隅の No.10 列のうち東側 7 基に貼紙があり、「取消」と墨書されている。旧配置図作成時（明治 19 年）までは 10 基が並び、東側 7 基はその後に除外されたと考えられる。現況の No.10 列は 4.7 m 長の区画中央に 2 基があるのみで（1 基は亡失）、左右の隙間が広い（写真⑤）。このことから、この区画は墓地建設当初から変更されていないと考えられる。
- 墓石は 122 基が現存するが、本来は 123 基あり、No.10 列区画の西端にあった軍夫金子新吉墓は亡失している。昭和 54 年刊の『北部町史』「明德上市の原官軍墓地 寄鶴上市の原官軍墓地 墓碑調査」（長井 1979）には記載があるので、亡失はそれ以降のものと考えられる。
- 墓石は概ね造営当初のものとみられるが、No.1 - 4 裕 繁三郎・No.2 - 11 美間田壽賀造の陸軍兵卒墓石 2 基のみは復元である。ともに、他とは異なり墓石の縁辺を小さく面取りしている（写真⑥）。
- 軍夫墓の配置には変更が認められる。旧配置図と比べると、No.4 - 66 吉川安平墓と No.4 - 68 光崎用八墓の位置、No.10 - 121 梅田久四郎墓と No.10 - 122 宮原外三郎墓の位置が入れ替わっている。
- No.10 - 121 梅田久四郎墓・No.10 - 122 宮原外三郎墓は軍夫墓だが基礎が 2 段ある。下段は、兵卒墓の転用であろうか。前者（No.10 - 121）は上段がコンクリート製で、明らかな後補である（写真⑧）。
- 旧配置図には見られないが、現況では No.2 列の東端に凝灰岩製の地藏立像（丸彫り、無銘、総高 34 cm）がある（写真⑦、昭和写真・50 年写真では写っていないので不明）。陸軍墓地は、葬儀については神式・仏式で施行されるものの、景観については特に仏教性を廃した企業墓地であり、また、下記の明治 6 年（1873）制定の所謂『下士官兵卒埋葬法則』（陸軍省大日記、アジア歴史資料センター検索）の記述からみても竣工当初のものではなく、据えられたのは、恐らくは内務省による墓地の維持管理がなされなくなった現代以降と考えられる。

Ref. C08070041600 : 『陸軍埋葬地ニ葬ルノ法則』「下士官兵卒埋葬法則別冊之通相定候條此旨相達候事 明治六年十二月 陸軍卿山縣有朋」、「舊現ニ基キ神祭又ハ佛祭ヲ以テ施行スヘシ」、「死者ノ親族又ハ故舊ヨリ其備納即チ燈籠水鉢等ヲ建設スルヲ許サス」

なお、No.2 列の区画の現況を見ると、地藏立像を設置するのに伴って縁石が付け足されるなど拡張された痕跡は認められない。

以上、特に軍夫墓については、少数にもかかわらず亡失や配置の移動・基礎の後補など、変更が多いことが指摘できる。

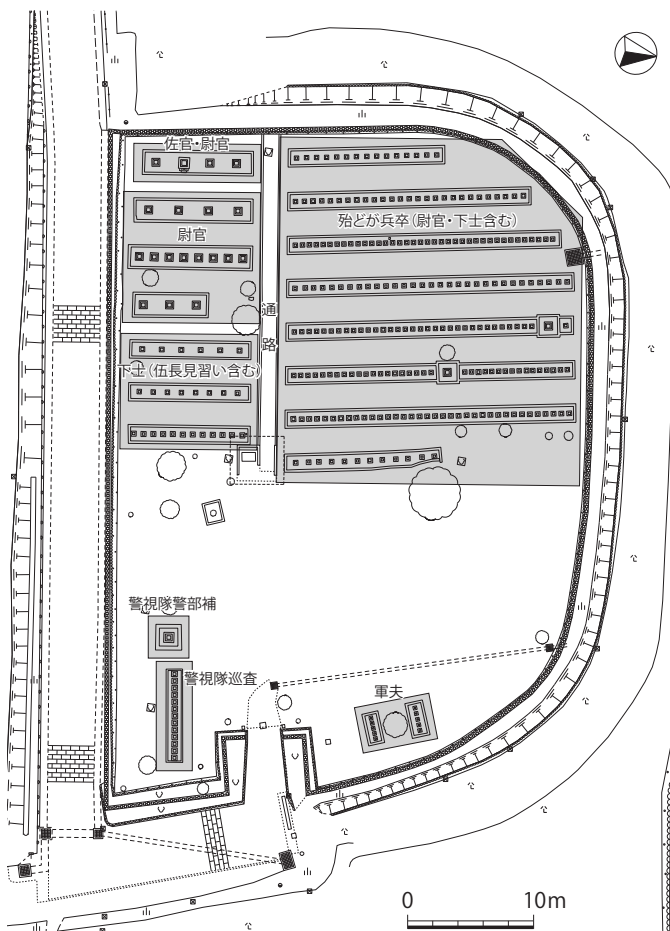
追記：現況の墓石銘と旧配置図の記銘では異なる箇所があり、旧配置図は誤記と考えられる。No.4 - 60 石橋七五三吉は旧配置図では石橋七五三郎、同じく No.4 - 62 宮畑村吉は村畑村吉となっている。No.4 - 65 軍曹佐々木和太郎は旧配置図では鈴木和太郎、階級は兵卒となっている。

3. 墓石の配置（第7～11図）

墓石は122基が現存し、平面長方形の安山岩切石に囲まれた区画内ごとに並んでいる。この区画は10列あり（No.1～10列）、東側4列、西側6列がそれぞれほぼ平行して、整然と配置されている。前節で触れた旧配置図（第9図）を見ると、墓石の配置について数箇所の違い（変更）はあるものの、原則同じであり、現況は竣工当時の状況をほぼ保っているといえる。

区画の規模（東西長）は三大別される。5.5～5.75 m（No.1・2・5～9列）、8.5～8.6 m（No.3・4列）、4.7 m（No.10列）があり、それぞれの規模と墓石数はほぼ相関している。No.3・4列については、規模に対して数が多く、墓石と墓石の隙間が無く基礎どうしが接している。他の区画と異なり、再整理されたかのような感があるが、旧配置図でも同様の表現が認められ、これも竣工当時の配置と考えられる。

区画の配置は、戦死者の階級についてみると、これを明確に反映していない。特にNo.4列では多くの兵卒墓が並ぶ区画内に、尉官墓・下士墓・軍夫墓が混在している。本市七本官軍墓地、玉東町高月官軍墓地・宇蘇浦官軍墓地（熊本市教委2025・玉東町教委2012）や「神風連の変」の戦死者墓地である本市花岡山陸軍墓地など、周辺の官修墓地では階級ごとに墓域や区画が分けられており、この違いは本墓地の特徴といえる。また、所属や戦死日についてもこれを明確に反映した配置は認められない。

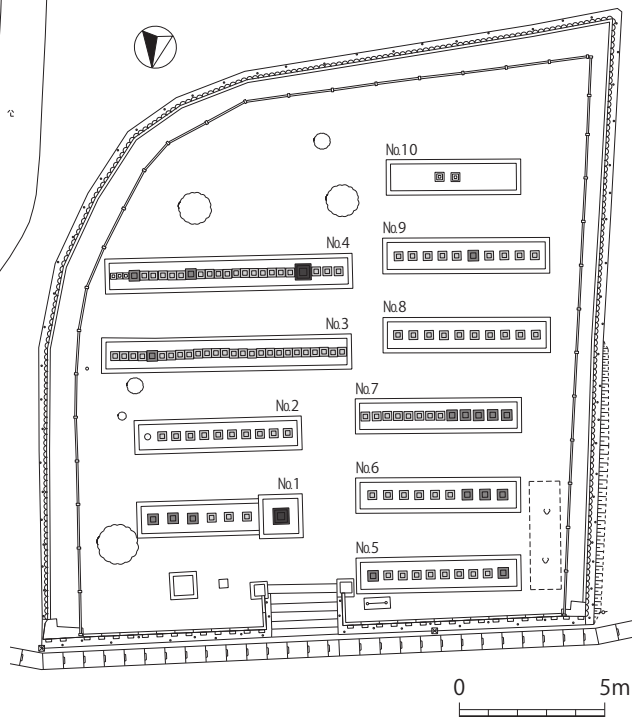


第10図 七本官軍墓地配置図 (1/600)

- 尉官
- 下士
- 兵卒
- 軍夫



七本官軍墓地（南西から）
※手前は佐尉官・下士墓域、奥は殆どが兵卒墓



第11図 明德官軍墓地 階級ごとの配置図 (1/260)

4. 墓石の形状・規模（第12図、第4表）

墓石の形状は統一されている。棹石（墓標）は頭部角錐形の角柱（横断面正方形）、基礎（台）は上面が正方形の立方形で、上面に棹石を嵌めるための刳り込みを設けている。基礎は、尉官墓は2段、下士・兵卒・軍夫墓は1段である（No.10 - 121・122の軍夫墓は後補により2段）。

墓石の規模は階級ごとに異なる。個別には小異が認められるものの、概ね下記表の通りである。

第4表 墓石の規模計測表

階級	計測部位	棹石部(頭部角錐形角柱, 横断面正方形)			基礎部(上面正方形)	
		幅・奥行	総高(頭部含む)	角柱部の高さ(頭部除く)	幅・奥行	上段の幅・奥行/高さ
士官(中尉・少尉):2基		24~24.5cm(約8寸)	99cm・99.5cm	96cm(約3尺2寸)	55cm(約1尺8寸)	42.5cm(約1尺4寸)/15.5cm(5寸)
下士(軍曹・伍長):17基		18~18.5cm(約6寸)	79.5~81.5cm 80~80.5cm主体	78~81.5cm 80~80.5cm主体(約2尺6寸)	36.5~37cm (約1尺2寸)	—
兵卒・喇叭卒:96基 ※復元2基を除く		15~15.5cm(約5寸)	68.5~72.5cm 69.5~70.5cm主体	66~69cm 67.5~68cm主体(約2尺2寸)	30~30.5cm(約1尺)	—
軍夫:5基		9~9.5cm(約3寸)	45~46.5cm 46.5cm主体	38.5~44.5cm(約1尺3寸~1尺5寸) ※明確な主体認められず	21~22cm(約7寸)	—

※同じ部位でも位置により数mmの差異が生じるため、計測値は5mm単位で求めている。基礎の高さは周囲がモルタル敷きのため不明。

上記の形状・規模について、陸軍省大日記（アジア歴史資料センター検索）の文書2件を紹介する。

1つ目は、明治10年（1877）8月1日付、陸軍大尉谷村猪介が陸軍中将鳥尾小弥太に宛てた『負傷死亡軍人軍属石碑製鑿着手之儀ニ付伺』(Ref. C09081207200) で、階級ごとの形状・規模が図掲されている。この図によれば棹石の形状はいずれも頭部角錐形角柱、基礎は立方形で尉官墓は2段、下士・兵卒墓は1段である。以下、規模を列記する。

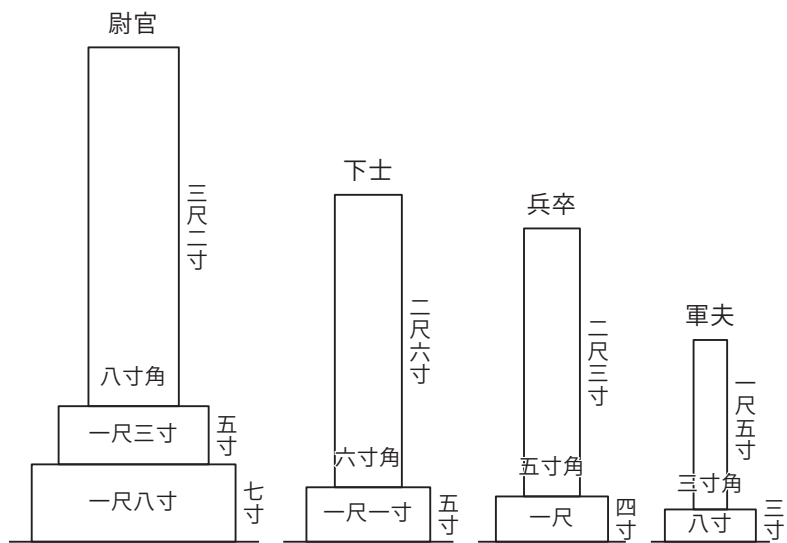
士官：棹石部高（角錐形の頭部を除く高さ、以下同）3尺2寸、8寸角。基礎下段高7寸、同上段高5寸。
下士官：棹石部高2尺6寸、6寸角。基礎高5寸。
兵卒：棹石部高2尺3寸、5寸角。基礎高4寸。

2つ目は、明治10年12月3日付、田邊陸軍中佐が旧軍団事務所へ宛てた文書(Ref. C09082367700)である。「西南倭徒征討ニ付、戦死之者墓碑寸法並書式、御内定之趣、承知致候…」として、1つ目の『負傷死亡軍人軍属

石碑製鑿着手之儀ニ付伺』に加え、軍夫についても墓石の規模が記されている。尉官（士官）・下士官・兵卒墓については同値で、軍夫墓の規模は、高さ1尺5寸、3寸角である。

なお、第12図は、以上をもとに水野公寿の成果（水野2007）を加味したものである。

本墓地の墓石規模は前記の規定をほぼ遵守したものと見えるが、軍夫墓については特に棹石高について規格性が乏しい。軍夫墓は、前述のように亡失や配置の変更などが目立っており、墓石の製作段階から後の維持管理にいたるまで、やや粗略



第12図 階級ごとの墓石の規模



階級による墓石規模の違い (No.1列)

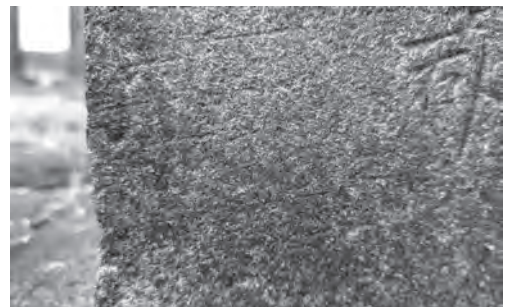
に扱われた可能性がある。下士・兵卒墓についても数値に小さなばらつきが見られる。兵卒墓では、棹石高が規定2尺3寸に対し実物は67.5～68cm（約2尺2寸）が主体となっている。これは本市七本官軍墓地も同様で、約2尺2寸が主体である（熊本市教委2025）。参考資料として明治9年（1876）10月「神風連の変」の戦死者墓が並ぶ本市花岡山陸軍墓地の棹石高を挙げる。尉官級は88.5～94.0cmで主体は91.5～92.0cm（約3尺）、下士級は74.5～77.5cmで主体は75～77cm（約2尺5寸）、兵卒級は59.5～69.5cmで主体は61～62cm（約2尺）である。後二者については、明治7年（1874）10月改訂の『陸軍下士官兵卒埋葬法則』（陸軍省大日記、アジア歴史資料センター検索、Ref. C04026020500）の規定値「下士ニ在テハ高サ二尺五寸方六寸、兵卒ニ在テハ高サ二尺方五寸」に沿ったものといえるが、特に兵卒墓については本墓地よりも数値のばらつきが大きい。

このような数値のばらつきは、当時の加工技術の限界、あるいは一時期に多くの墓石を製作した結果などによる可能性があるものの、本墓地のように棹石高が概して規定値よりも低いことについては、製作地において規定遵守が厳密ではなかったためと考えられる。

5. 墓石の石材・調整技法

石材は、No.10 - 121 宮原卯三郎・No.10 - 122 宮原卯三郎の軍夫墓2基の棹石については凝灰岩製、他は安山岩製である。安山岩は肉眼観察によれば全て同質で、僅かに青緑色味がかかった白灰色を呈し、石英微粒・長石微粒・角閃石粒を含む。表面には地衣類の付着が目立ち、その部分ではにぶい紫色を呈している。これらの特徴は周辺地では金峰山系安山岩、特に金峰山東部の「島崎石」に共通し、前出の花岡山陸軍墓地の墓石材にも用いられている。この石は、江戸時代以降、建築部材・墓石などに多用され、明治時代初期作製の『肥後国郡村図』によれば、当該3箇村には石工職がおり、島崎村38戸・谷尾崎村8戸・宮内村4戸とある。記銘例では、弘化4年（1847）の本市本妙寺石像仁王像が顕著なもので、台座に「島崎村／石工 棟梁團次…」とある。陸軍に関わった事例では、佐賀市乾亨院と久留米市山川招魂社にある明治7年（1874）の佐賀の乱における熊本鎮台第十一大隊戦死者の合祀墓石がある。ともに基礎に「白川縣／第二大區九少區／宮内村／鑄石師／久吉静衛」と刻されている。石材は石灰岩（恐らくは八代産）で島崎石ではないものの、当該村の石工が陸軍墓の製作に関わった先行事例といえる。

調整は表面が研磨してあり、特に棹石について明瞭である。また、少ないながら数基において条線状の傷が認められる部分があり、これは石鋸による切断痕が残ったものとみられる。墓石を切断、整形した後、研磨調整した工程が伺える。



条線状の切断痕

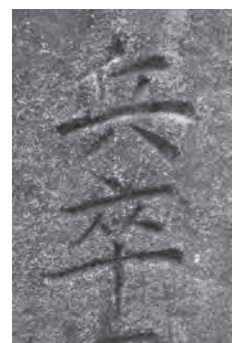
6. 墓石の記銘

a. 彫り方

墓石の記銘は、いずれも楷書である。彫り方は尉官墓2基の正面銘（階級・氏名）のみは断面U字形の竹彫りで、他は薬研彫りである。文字の大きさに応じたものであろうが、竹彫りはより丁寧な彫り方であり、これによって階層性を表現したものと考えられる。前記の七本・高月・宇蘇浦官軍墓地や花岡山陸軍墓地も同じで、将官・佐尉官の正面銘は竹彫りとなっている。なお、復元墓石（No.1 - 4 裕 繁三郎・No.2 - 11 美間田壽賀造墓）は、兵卒にも関わらず竹彫りである。



竹彫り



薬研彫り

b. 記銘の位置（第13図）

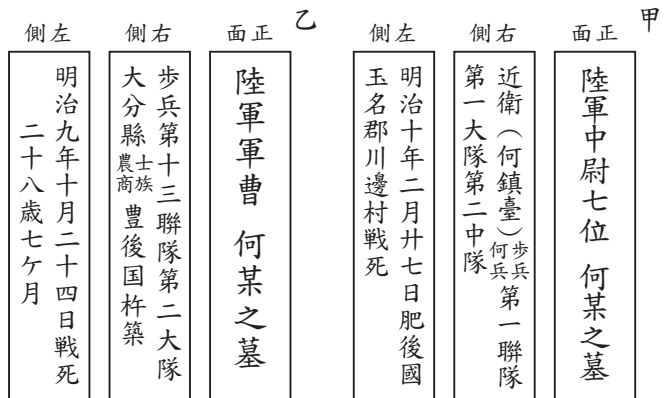
本墓地の墓石の記銘が刻まれる面は概ね統一され、3基を除いて正面に階級・姓名・「之墓」、右側面（向って右、以下同）に所属、左側面（向って左、以下同）に戦死日・戦死地、背面に出身地・籍である。例外はNo.8 - 102 兵卒寺井與十郎墓、No.10 - 121 軍夫梅田久四郎墓・No.10 - 12 軍夫宮原卯三郎墓で、寺井與十郎墓は背面に戦死日・戦死地、左側面に出身地・籍、軍夫墓2基は右側面に出身地、背面に戦死日・戦死地が刻されている。これについても軍夫墓では規格性が乏しい。

この記銘の内容と刻まれる面は、他の県内官軍墓地を見ても、左右側面が逆になる墓石（右側面に戦死日・戦死地、左側面に所属）が主体の墓地はあるものの、ほぼ統一されている。花岡山陸軍墓地にある「神風連の変」の墓石では、士官級の墓については規格性が認められるが（右側面が出身地、左側面が戦死日・享年、背面無銘）、下士・兵卒級の墓では、右側面が所属、左側面が出身地・籍、背面が戦死日・享年のものが多い傾向はあるものの、刻まれる面は明確には統一されていない（戦死地はいずれも熊本鎮台周辺なので記されていない）。この違いは、西南戦争において大量の死者が発生したため、大量の墓石を製作する必要性から、記銘の書き方がシステムチックになったことを示すと考えられる。

以下、記銘の書き方が規定化される経緯に関する資料として、陸軍省大日記（アジア歴史資料センター検索）の文書3件を紹介する。

1. Ref. C09082367700 : 4節において前述した明治10年12月3日付、田邊陸軍中佐が旧軍団事務所へ宛てた文書である。墓石の規模に加え、記銘の内容と刻まれる面が記載され、正面が階級・姓名・「之墓」、右側面が所属、左側面が戦死日・戦死地、背面が無銘とされている。

2. Ref. C09082340800:1 に先立つ9月20日付にも同様の記載がある。熊本鎮台の工兵第6方面提理代理、別役成義少佐が征討総督本営に宛てた文書である。軍団病院課より回送された名簿には「位階年齢並籍族産所等之如キハ記載無ニ付」のため「本文位階取調之儀ハ早々其筋へ照会」して欲しいと依頼している。記すべき銘の情報が判らず、苦慮したことがうかがわれる。また、右のように甲乙2例の案を示し「従来当地埋葬地之墓碑ハ別紙乙号之通記載有之候就」と前置きしながらも「別紙甲号之通記入可致答ニ付、為此段添テ申進候也」としている。



第13図 別役成義文書の甲乙2案

※アジア歴史資料センター（Ref. C09082340800）を模写。

3. Ref. C04028160400 : 2の文書に追加する内容の伺いが、明治11年4月4日付文書に見られる。熊本鎮台指令長官谷 干城少将より山縣有朋参軍に宛てたもので、「父兄姓名等記載不致テ、同隊中同姓同名之者モ有之屢々、難相知候」、「原籍府県之区画増加背面へ記載致度、此段相伺候也」として、しばしば同じ隊中に同姓同名の者がいることがあって区別ができないことから背面に出身地・籍を刻むことを提言している。なお、同資料には、同年8月10日付の回答もある。「本文御許可相成候得者、工兵第六方面本署江御達相成度、此段申副也…石碑背面記載方増加可致候事…」として、この伺いが許可されたことが記されている。

以上の経緯から、記銘が刻まれる面については、正面・左右側面は別役少佐、背面は谷少将の提言が採用されることとなった。出身地・籍、戦死地などを詳細に刻むため、また所属は中隊名までを刻むために文字数が多くなり、棹石の4面全てを使用しなくてはならなくなったことによると推察されるが、その提案が多く墓地を建設し、実情を良く知る現地の熊本鎮台からのものであったことが注目される。

c. 記銘の癖字・異字 (第5表)

書家の想定

墓石の記銘は能書家によるものと考えられるが、具体的な書家名は不明である。ただし、七本・高月・宇蘇浦の各官軍墓地については、その一人として南画家竹富清嘯が特定されており、「千余基の揮毫を一手に属せられ」という(前川 2012)。本墓地の軍夫墓を除く墓石の記銘において多用され、また特徴が共通する癖の強い字形2種、第○聯隊・第○中隊の「第」、歩兵の「歩」



明德官軍墓地 七本官軍墓地 高月官軍墓地 宇蘇浦官軍墓地

共通する「歩」・「第」

を見ると、周辺の七本・高月・宇蘇浦官軍墓地でも共通する字形が多く確認できる。この字が竹富清嘯のものとして特定することは難しいものの特徴的な字形からみて、少なくとも同一人物による揮毫である可能性は高いといえよう。また、これら周辺3墓地の建設時期が明治11年(1878)8月で、本墓地の墓石製作時とされる同年3月と時期が近いことから、同一人物がこれら複数の墓地の墓石記銘に関わった可能性を評価することができる。

異字の種類

記銘について注目されるのは、異字がみられることである。第5表に一覧を掲示した。ここで言う異字とは、通常のパソコン操作で表示できないなど、現在では汎用されていない字形を指す。明らかに字形が本来と異なるもので、画数が足りないものを含め、略字も異字としている。また、墓地建設当時においては汎用されていた文字で異字として扱ったものもある。

以下、注目される文字を取り上げる。「與」は3種、4箇所が見られ、いずれも異字である(No. 2 - 16, No. 5 - 69・No. 8 - 102, No. 8 - 110)。画数が多い字なので、1人の書家が書き分けたというよりも、異なる書家の癖が反映された可能性が高いとみるのが妥当であろう。次に挙げるのは、軍夫を除く各墓石に共通する「戦死」である。「戦」・「死」ともに3種類の字形があり、その組合せ方で5種が認められる。仮に1~5類とし、1類が殆どを占めており、これも書家個人の癖を反映したものとみられる。

以上より、本墓所の墓石の記銘については、複数人の書家が携わった可能性が高いといえる。



16 69・102 110

「與」の字形



1類:104基 2類:1基 3類:1基 4類:1基 5類:8基

「戦死」の字形

第5表 墓石記銘「異字」一覧表

※凡例

※本表で「異字」とするのは、現在では汎用されていない文字を指す。明らかに字形が本来と異なるもので(略字を含む)、当時においては汎用されていた文字も含まれる。

なお、下記のような場合は「異字」とは扱っていない。

- ・「国」など：国構えの中の「ノ」が「ノ」となっている。「ノ」の位置が本来とは明らかにずれている。
- ・「久」など：「ク」の2画目の横線(実際には右斜め線)が意識して書かれているのか、「ノ」と書いていただけなのに始筆の筆の入りが強いため横線に見えるのか、明確に区別できない。

活字	数字は墓石番号 (列番号は省略)
写真 (異字)	

愛 	7・20・25・27・ 49・65・108	會 	70	飽 	59
足 	31・117・118・ 119	磯 	23	今 	29
員 	10・78	宇 	20	宇 	111
卯 	119	臼 	103	衛 	5・6・7・9・10・ 12～31・47・49・ 51～58・70～78・ 86～110
於 	46・49・51～58・ 64・94	岡 	29	御 	112
御 	122	角 	111	蔭 	24
勘 	112	紀 	5・12・21・63	騎 	73
北 	100・102	吉 	26・30・41・42・ 44・50・70・72・ 81・90・118	切 	51

熊	49・51・52・54	雲	111	藝	46
建	64	五	14・32・37・50・ 73・107・112・ 118	吾	35
国	2	国	101	惟	93
沙	70	齋	33	埼	48
作	67	笹	105	寒	65
死	2・8・67	死	1・3・5・6・7・ 9・10・12～58・ 60～65・69～120	輜	66
嶋	78・110	重	23・37	所	72
少	47	須	6	杓	98
鈴	56	戦	3・5・6・7・9～ 48・50・52・54・ 60～65・69～120	戦	1・2・49・51・ 53・55～59

戰	8	藏	1・18・19・33～ 36・40・45・48・ 49・58・77・79・ 94・106・110・ 113・115・117～ 120	卒	4
菌	112	多	69・100	辰	34
出	111	杜	100	砺	19
砺	105	礪	91	礪	40・41
礪	72	寅	44・50・53・91	名	85・98・106
廿	45	廿	66・80・122	葉	6
幡	87・95・116	幡	97・109	橋	64
畑	62	播	101	久	62
鳳	22・104	淵	83	淵	97

歩 	1・17	歩 	3・5・6・7・9・ 10・12～16・18 ～49・51～65・ 69～120	摩 	115
前 	72	前 	108	美 	52・55
本 	95・99	柳 	7	與 	16
與 	69・102	與 	110	奠 	9
留 	32	両 	21	呂 	118
脇 	6・12				

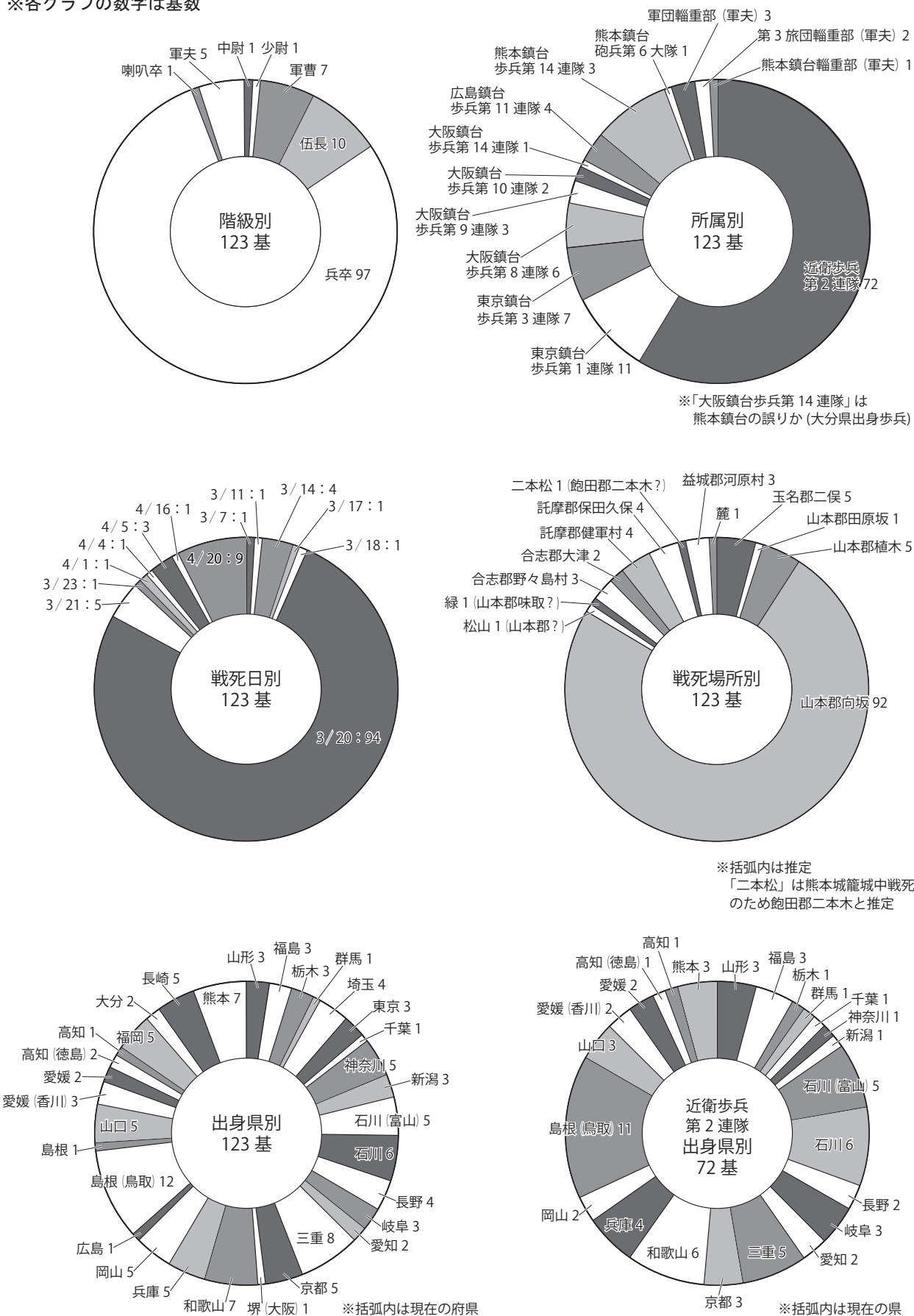
d. 記銘の分類と集計 (第14図)

第14図は全123基(現存は122基)について、各墓の記銘を階級・所属・戦死日・戦死地・出身県別に分類、集計したものである。所属は近衛歩兵第2連隊第2大隊が72基(約58%)、戦死日は3月20日が94基(約76%)、戦死地は向坂が92基(約75%)で、偏在性が明確である。本墓所は、3月20日の向坂の戦いにおける死者墓を主体とするものといえる。

向坂の戦いは終盤においては戦場が植木口に移っており、同日で参戦部隊所属の「植木戦死」記銘の3基も一連の戦いのものとみることができよう。この3基を加えると、3月20日における向坂の戦いの戦死墓は94基で、その内訳は、近衛歩兵第2連隊第2大隊72基、東京鎮台歩兵第1連隊8基、同第3連隊7基、熊本鎮台歩兵第14連隊4基、大阪鎮台歩兵第9連隊3基である。

なお、死者の出身県には明確な偏在性は認められない。これは鎮台兵卒の場合、通常、出身県近くの鎮台に配属されるのに対して、基数の多い近衛兵卒は、精鋭として地域を問わず全国から徴募されたことが要因の一つと考えられる。

※各グラフの数字は基数



第14図 明德官軍墓地墓石銘分類集計グラフ

7. 向坂の戦いの概要と戦死者墓地

a. 戦いの概要（第1図、第6表）

向坂は本墓地の北西近くを通る旧豊前街道本道の坂道で、植木一熊本間では唯一の難所といわれる。以下、本墓地の戦死日・戦死地の多くを占める3月20日の向坂における戦いの概要を記す（参謀本部編纂課1887・陸上自衛隊北熊本修親会1977ほか）。

3月20日、田原坂陥落後に政府軍諸隊は熊本城（熊本鎮台）を目指し、薩摩軍が遺棄した砲4門や小銃100挺など多数の軍需品を鹵獲しつつ向坂まで進出した。第1旅団津田少佐・津野少佐が率い、田原坂陥落戦の先鋒を担った諸隊で、ここにおいて薩摩軍と遭遇する。対する薩摩軍は、薩將貴島清・中島健彦等が背走する田原・二俣・横平山の友軍を收容してこれに抗した。政府軍は当初、第2旅団参謀の今井中佐・三原大尉の強行論と諸隊を率いる津田少佐・津野少佐等の慎重論とがあって対立したが、第2旅団参謀長野津大佐が進出するに及び、一挙に突破して熊本城を目指すこととなった。薩摩軍は第1番大隊7番小隊半隊、第3番大隊6番小隊半隊の他、第3大隊7・9番小隊の救援によりこれを譲らず、さらには第2番大隊長村田新八の要請で熊本隊9番小隊（深野隊）が加わると攻勢に転じた。向坂正面の政府軍は守勢となって後方を断たれて孤立し、弾薬が無くならないうちにと17時頃に植木口まで撤退したが、薩摩軍の追撃により弾薬・食糧多数を棄ててさらに後退し、救援諸隊が到着するに及んでこの攻撃を退けた。以上、戦場は向坂とその後、政府軍が撤退した植木口である。

政府軍の参戦部隊はやや不明瞭である。『征西戦記稿』（参謀本部編纂課1887）の戦況の記述に士官名があり、また、同書掲載の3月20日・向坂死傷者の一覧表に所属部隊が記載されているが、後者については、氏名が記載されている士官個々の墓石の記銘を確認すると3月20日ではあるものの「田原坂戦死」など明らかに戦闘地が異なるものがあり、やや信憑性に欠ける。そこで、この一覧表をもとにしながら、本墓地の墓石の3月20日・向坂戦死の銘の所属部隊、その墓石銘と多くが一致することから向坂で薩摩軍と遭遇した開戦時の部隊とみられる田原坂陥落戦の先鋒諸隊（陸上自衛隊北熊本修親会1977）、さらには他の官軍墓地における3月20日・向坂戦死銘の墓石に記された部隊などを加味し、これらに一致するものを参戦部隊と考え（一致しないものは除外）、第6表に記す。

第6表 向坂の戦いの参戦部隊想定表

本墓地の墓石銘の所属隊					田原坂陥落戦の先鋒諸隊 ※(陸上自衛隊北熊本修親会1977)参照				3月20日の死傷者の所属隊 ※(参謀本部編纂課1887)参照				
所属	連隊	大隊	中隊	基数	所属	連隊	大隊	中隊	所属	連隊	大隊	死者	負傷者
					第1旅団近衛	歩兵1	2	3	第1旅団近衛	歩兵1	2	23	51
第1旅団近衛	歩兵2	2	2	51	第1旅団近衛	歩兵2	2	2	第1旅団近衛	歩兵2	2	14	57
第1旅団近衛	歩兵2	2	4	21	第1旅団近衛	歩兵2	2	4					
東京鎮台	歩兵1	1	3	1					東京鎮台	歩兵1	1	23	35
東京鎮台	歩兵1	1	4	4					東京鎮台	歩兵1	3	2	18
東京鎮台	歩兵1	3	2	3					東京鎮台	歩兵3	3	20	45
東京鎮台	歩兵3	3	2	7	東京鎮台	歩兵3	3	2	東京鎮台	歩兵3	3	9	25
熊本鎮台	歩兵14	3	1	4	熊本鎮台	歩兵14	3	1	熊本鎮台	歩兵14	3	3	12
大阪鎮台	歩兵9	2	4	3	大阪鎮台	歩兵9	2	4	大阪鎮台	歩兵9	2	3	1
									東京鎮台	砲兵	1		
					警視局	抜刀隊1箇小隊			警視局	抜刀隊		11	8
									不明			5	17

b. 他の墓地における向坂の戦いの戦死者墓（第15図、第7表）

3月20日の向坂の戦いにおける政府軍死者墓は、本墓地の他の官軍墓地にも存在しており、本項ではこのことを取上げる。他の墓地については、戦死日が3月20日、戦死地が向坂の銘の墓石を確認することで明らかとなるが、前述の通り、戦闘地は終盤において植木口に移っており、このことも勘案しなけれ

第7表 他の墓地における3月20日 向坂の戦いの戦死者墓一覧表

墓地	所属	連隊	大隊	中隊	階級	死没地	負傷地	死亡日	基数	
熊本市	七本官軍墓地	第1旅団近衛	歩兵1	2	3	兵卒	植木		3月20日	2
		第1旅団近衛	歩兵2	2	2	中尉	向坂		3月20日	1
		東京鎮台	歩兵3	3	2	兵卒	向坂		3月20日	1
		軍団輜重部				軍夫	向坂		3月20日	1
									小計5	
玉東町	高月官軍墓地	第1旅団近衛	歩兵2	2	2	兵卒	向坂		3月20日	2
		第1旅団近衛	歩兵2	2	2	兵卒	植木		3月20日	1
		第1旅団近衛	歩兵2	2	4	兵卒	向坂		3月20日	1
		東京鎮台	歩兵1	1	3	兵卒	植木		3月20日	2
		東京鎮台	歩兵1	1	4	兵卒	向坂		3月20日	2
		東京鎮台	歩兵1	1	4	兵卒	植木		3月20日	6
		東京鎮台	歩兵1	1	4	兵卒	木葉病院	植木	3月22日	1
		東京鎮台	歩兵1	3	2	兵卒	植木		3月20日	1
		東京鎮台	歩兵3	3	2	伍長	向坂		3月20日	1
		熊本鎮台	歩兵14	3	1	少尉	向坂		3月20日	1
		大阪鎮台	歩兵9	2	4	兵卒	向坂		3月20日	1
									小計19	
玉東町	宇蘇浦官軍墓地	第1旅団近衛	歩兵2	2	4	兵卒	向坂		3月20日	1
		東京鎮台	歩兵1	1	4	兵卒	向坂		3月20日	1
										小計2
玉名市	高瀬官軍墓地	第1旅団近衛	歩兵2	2	2	軍曹	高瀬病院	植木	3月20日	1
		第1旅団近衛	歩兵2	2	2	兵卒	高瀬病院	植木	3月22日・4月3日	2
		第1旅団近衛	工兵第1小隊			兵卒	高瀬病院	向坂	4月4日	1
										小計4
南関町	肥猪町官軍墓地	熊本鎮台	歩兵14	3	1	伍長	植木		3月20日	1
										小計1
久留米市	山川招魂社墓地	東京鎮台	歩兵1	1	3	兵卒	久留米病院	向坂	4月17日	1
		東京鎮台	歩兵1	1	4	兵卒	久留米病院	植木	3月25日	1
		東京鎮台	砲兵	1		大尉	久留米病院	向坂	4月3日	1
		熊本鎮台	歩兵14	3	1	伍長	久留米病院	向坂	4月18日	1
									小計4	
長崎市	佐古招魂社墓地	第1旅団近衛	歩兵2	2	4	兵卒	長崎陸軍病院	向坂	4月16日・4月24日	2
										小計2
大阪市	真田山陸軍墓地	東京鎮台	歩兵1	1	3	兵卒	大阪陸軍病院	植木	4月12日	1
										小計1

※アミカケは植木戦死。病院名は墓石の記録に従う。

ばならない。ただし、3月20日は他にも植木近くでの戦闘があったため、向坂の戦いで植木戦死、という蓋然性を高めるために前項で挙げた参戦部隊所属の銘の墓石を扱うこととした。

結果、第7表の通り8墓地、38基を確認した。高瀬官軍墓地の第1旅団近衛工兵第1小隊兵卒墓1基のほかは、全て前項に挙げた参戦部隊の所属である。「向坂戦死」銘19基（負傷後別地での死亡を含む、以下同）は確実に向坂の戦いで戦死墓で、「植木戦死」銘19基についても、その可能性は高いと考えられる。これらと本墓地の墓石数との合計は、3月20日・向坂戦死銘の墓が110基（うち病院死6基）で、同日・植木戦死銘の墓を加えると132基（うち病院死12基）である。なお、「向坂戦死」銘の基数については『靖國神社忠魂史 西南の役』（靖國神社社務所1935）記載の戦死者数と一致する。

本墓地と他の官軍墓地では、戦死地の傾向について違いがみられる。本墓地では、向坂の戦いの戦死墓94基のうち、向坂が91基、植木が3基であるのに対し、他の墓地では負傷地を含め向坂が19基、植木が19基で、植木での戦死・負傷の比率が高くなっている。これは、戦いの終盤において戦闘地が向坂北方の植木口に移り、その戦死者・負傷者を当日の3月20日から旅団本営となった七本方面へと収容したことが要因とみられる。特に、本営に近い本市七本官軍墓地（5基中、植木2基）や後方の玉東町高月官軍墓地（19基中、植木11基）の基数は、このことを反映したものと考えられる。

今一つ、注目されるのは当日の戦闘で負傷し移送され、その後、病院において死亡した人の墓 12 基が見られることである。戦地から離れた高瀬・山川・佐古・真田山の各墓地の墓石については全て「…病院ニ於テ死」とあり、これらの墓は各病院の最寄りの墓地に造られている。なお、病院とは主に寺院や民家に仮設され、患者数に応じて分散・増設された臨時施設で、高月官軍墓地近くの木葉病院の場合は正念寺・徳成寺ほかに置かれていたことが良く知られている。高瀬病院（高瀬官軍墓地近く、以下同）、久留米病院（山川招魂社墓地）、長崎陸軍病院（佐古招魂社墓地）、大阪陸軍病院（真田山陸軍墓地）については、いずれも兵站拠点にあり医療具の調達や患者の移送に適し、また、手術など重症治療の対応も可能であった。特に長崎には臨時海軍事務局が置かれ、海路輸送拠点として戦略上も重要地であったことが注目される。「軍団病院日記抄」（『征西戦記稿』附録 1887）によれば、木葉から高瀬へ、高瀬から久留米・長崎へ、長崎から大阪へと患者を移送したとの記述があり、怪我の程度によって医療環境がより良い病院へと後送する体制が整っていたことが判る。ちなみに、病院治療後の傷病兵のため、三重県湯の山温泉に臨時療養所が設けられてもいる。



長崎第一分派病院が置かれた大音寺

死傷者の移送（陸送）については『従征日記』（川口 1878）に記述がある。

2月27日「今朝ヨリ傷痍ヲ受ケシ者絡繹シテ至ル、板扉ニ駕スルアリ、藁苞ヲ畚ト爲シ、之ニ駕スルアリ、四肢ノ輕痍ノ如キハ相扶持シテ徒歩セリ、其ノ死セル者ハ、四肢ヲ縛シ、青竹棒ヲ其空隙ニ貫キテ之ヲ荷フ、其ノ状猪鹿ノ如ク然リ」として、挿図「高瀬ノ死傷者ヲ南関へ送ルノ図」が示されている。

3月5日「是ノ日死傷ヲ病院ニ送ルニ、軍夫稀少ナルヲ以テ、土人を雇用スル」

以上、移送は軍夫が担い、死傷者が多い場合は臨時に地元民を雇ったとあり、移送方法については、負傷者は症状によって戸板、モッコ、歩行の扶助などで、死者は四肢を縛り、そこに竹棒を通して「猪鹿ノ如ク」担いだとある。なお、前出「軍団病院日記抄」によれば、負傷者の移送は、高瀬から久留米へは海路（3月7日以降）で、長崎・大阪へも海路であったことを付記しておく。

南関町肥猪町官軍墓地に3月20日戦死の伍長墓1基がある。このように戦闘当日の死で、戦地から離れた墓地に墓石がある事例はしばしば見られ、個々に事情があったのではあろうが、その理由は不明である。本例の場合、3月20日に大量の負傷者があって高瀬病院へは新たに145名が移送されていることから、以下は想像であるが、高瀬病院への収容が難しく直近の肥猪病院へと移送しようとしたが、その途上で死亡し、最寄りの肥猪町官軍墓地に葬ったということも考えられる。

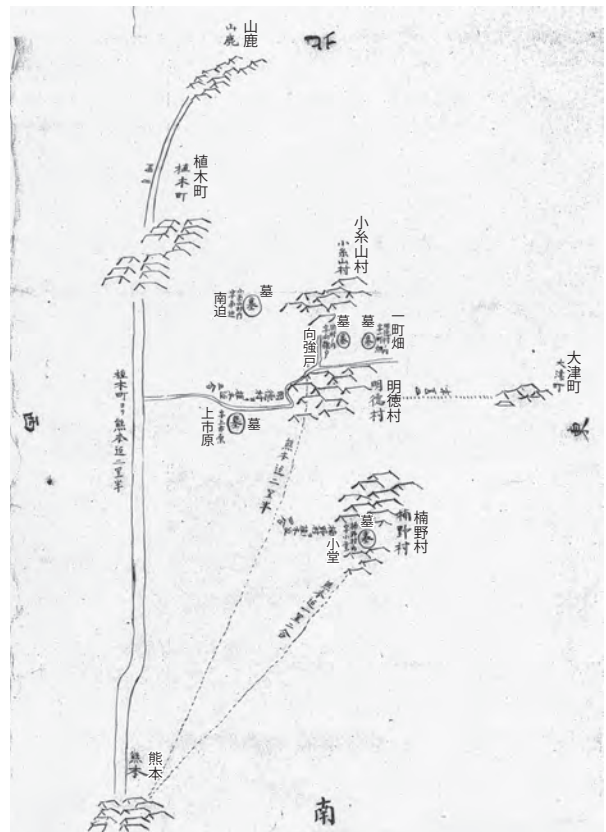


第 15 図 『従征日記』 2 月 27 日挿図「高瀬ノ死傷者ヲ南関へ送ルノ図」

8. 墓地建設の経緯（第16図）

本墓地の造営経緯について、文献資料をもとに記す。陸軍省大日記（アジア歴史資料センター検索）には、仮埋葬について以下3件の文書がある。

明治10年4月28日付、熊本県令富岡敬明と軍団本営に宛てた『官兵戦死骸仮埋葬御届』（Ref. C09084878000）では、明德村字上市原に51名、同村老町畑に26名、同村向強戸に1名、楠野村小堂に1名、小糸山村南迫に2名の計81名を、戦場の「近傍於届之ケ所ニ之仮埋葬取計届ノ段、該区戸長ヨリ別紙之通」に報告している。これと同内容・同日付の熊本県令富岡敬明宛『官軍戦死仮葬御届』（Ref. C09084878100）には、届出者「大二大区四小区副戸長永井茂基」が明記されている。大二大区四小区は、明德・楠野・小糸山村を含む11箇村である。以上より仮埋葬は、少なくとも向坂の戦いの約1ヶ月後までには地元住民によって行なわれたとみられ、戦闘地に最も近い上市原が大半を占めることが判る。なお、仮埋葬された遺体は収容しきれずに戦地に放置されていたものと考えられる。これに対し、前節7



第16図 仮埋葬地の位置図

※アジア歴史資料センター（Ref. C09084878200）に加筆。

において前述したように、七本官軍墓地・高月官軍墓地の戦死墓は後方の七本方面へと収容したものとみられ、この違いは本墓地の特徴といえる。

その後の同年7月1日付、第七大区三小区（現在の玉名市の菊池川南岸域9箇村）副戸長紫藤尚義の文書（Ref. C09084878200）は征討総督本営の罫紙に書かれたもので、4月28日付の仮埋葬届を略した内容に加え、仮埋葬地の地図が添付されている。

本墓地の工事竣工、墓石建設日については、明治19年4月5日、飽田託麻宇土郡役所宛に近隣の鹿子木村副戸長河喜多能安が回答した文書がある。これによれば「本縣宛取調候処」、本墓地の「建設年月」は明治10年9月で、「石碑建設年月」は不詳ではあるものの明治11年3月とし、これは「口頭ニテ地方ヨリ申出候」によるものとしている。

〔参考文献〕

川口武定 1878『従征日記』（1988年復刊 青潮社）

玉東町教育委員会 2012『玉東町文化財調査報告第8集 玉東町西南戦争遺跡 調査総合報告書』

熊本市教育委員会 2025『熊本市の文化財第127集 西南戦争遺跡 田原坂総括調査報告書』

参謀本部編纂課 1887『征西戦記稿』（1987復刊 青潮社）

長井魁一郎 1979「明德上市の原官軍墓地 寄鶴官軍墓地 墓碑調査」『北部町史』北部町史編纂委員会

前川清一 2012「西南戦争における官軍墓地の成立と現状について」『玉東町文化財調査報告第8集 玉東町西南戦争遺跡 調査総合報告書』玉東町教育委員会

水野公寿 2007「西南戦争の戦死者—その埋葬と慰霊」『近代熊本 No.31』熊本近代史研究会

靖國神社社務所編 1935『靖國神社忠魂史 西南の役』（1990復刊 青潮社）

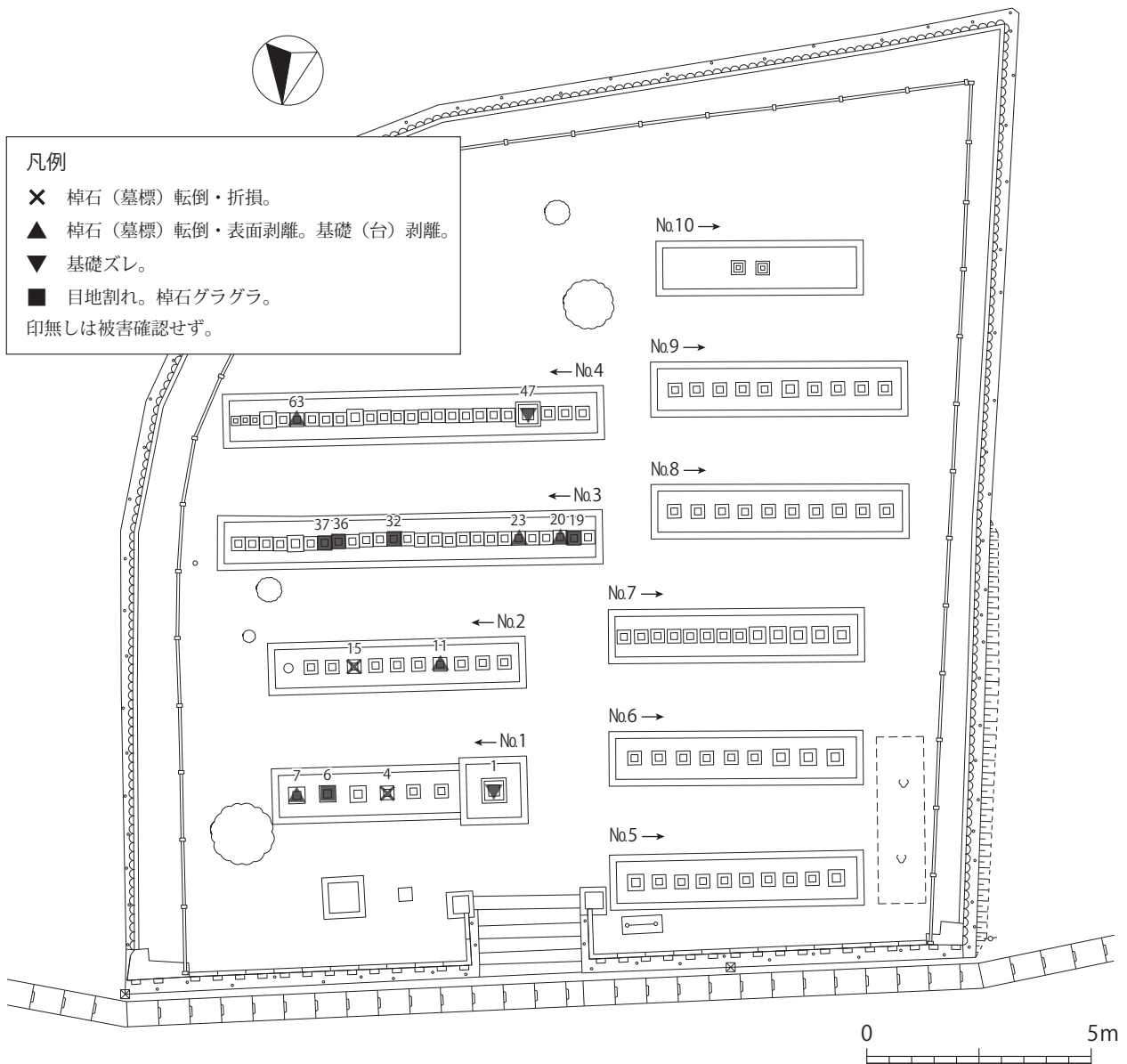
陸上自衛隊北熊本修親会 1977『新編 西南戦史』株式会社 原書房

第IV章 熊本地震による被害

1. 墓石の被害状況（第17図，第8表）

平成28年8月22～25日、同年4月に発災した熊本地震による被害状況確認を実施した。本墓地は震源から比較的離れ、また地盤が安定した洪積台地上に立地するものの、墓石について被害が認められた。

被害は、棹石（墓標）の転倒・折損や小さな剥離、基礎（台）のズレ（2段の場合）・小さな剥離、棹石と基礎の接合箇所の目地剤（漆喰）の割れ、棹石が安定せずグラグラになったことなどで、全122基中14基（約11%）について確認された。いずれも墓地内東側の墓石で、西側の墓石には被害は確認されなかった。その理由は不明だが、あるいは、墓地造成の際、周辺地形から推して南東側は盛土されたとみられることから、地盤が不安定であったためとも考えられる。なお、本墓地よりも約4.4km北西にあって、より震源から離れている七本官軍墓地では本墓地と同様、洪積台地上に立地しているにも関わらず、全300基中83基（約28%）について被害が確認されており、本墓地よりも被害率が高く、特に墓石表面の剥落等が目立つ。これは七本官軍墓地の墓石が警視隊墓14基を除いて軟質の砂岩製であり、本墓地は硬質の安山岩であったことが要因の一つとみられる。



第17図 熊本地震被害状況図（1 / 150）

第8表 熊本地震による墓石被害状況一覧表

No.1列-1	中尉 中尾浩藏墓	基礎上段が北側にズレ。	No.3列-20	兵卒 保木直一郎墓	目地割れ。棹石南側に転倒。
No.1列-4	兵卒 碓 繁三郎墓	復元墓石。棹石北側に転倒、折損。	No.3列-23	兵卒 村重磯次郎墓	目地割れ。棹石南側に転倒。
No.1列-6	軍曹 脇葉熊之助墓	棹石グラグラ。	No.3列-32	兵卒 小峰留次郎墓	目地割れ。棹石グラグラ。
No.1列-7	軍曹 柳生一馬墓	棹石南側に転倒。基礎表面剥離。	No.3列-36	兵卒 森川金藏墓	目地割れ。棹石グラグラ。
No.2列-11	兵卒 美間田壽賀造墓	復元墓石。棹石南側に転倒。棹石・基礎表面剥離。	No.3列-37	兵卒 當磨重五郎墓	目地割れ。棹石グラグラ。
No.2列-15	兵卒 石原好忠墓	棹石北西側に転倒、折損。	No.4列-47	少尉 稲本正雄墓	基礎上段が東側にズレ。
No.3列-19	兵卒 表 金藏墓	目地割れ。棹石グラグラ。	No.4列-63	兵卒 楠瀬松太郎墓	棹石南側に転倒。

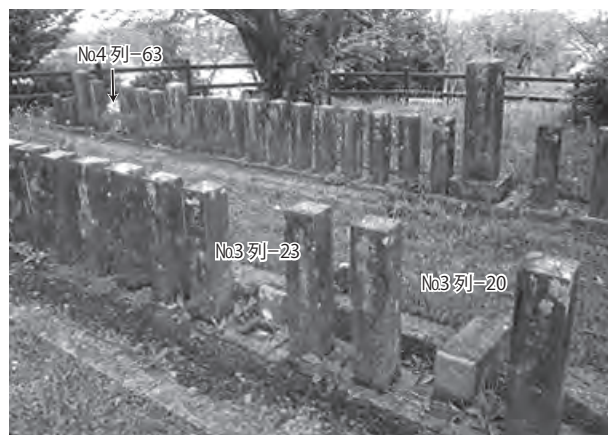
2. 墓石の修復

熊本地震があった平成28年度の3月、被害が確認された墓石について、石造文化財の保存等に実績のある事業者へ委託し、主に以下の修復作業を行なった。棹石が転倒したもの、目地が割れるなどして棹石がグラグラになったものについては、下面に免震シートを敷いて原位置に戻し、基礎との接合箇所にソイルセメントを塗布する。棹石が折損したものについては、破面に金属アンカーを通して結合し、表面の亀裂にソイルセメントを塗布する。本作業で用いたソイルセメントは微細な砂粒を混ぜたもので、補修箇所を強化し亀裂を目立たなくする効果があり、また、墓石材（安山岩）への影響も少ないものである。

なお、作業後、約8年が経過した現在では、修復箇所の劣化は認められていない。



No.1列・No.2列の墓石転倒



No.3列・No.4列の墓石転倒



No.3列-36, 目地割れ



No.1列-4



No.2列-15



No.4列-47, 基礎ズレ

※No.1列-4、No.2列-15ともに、上写真は棹石折損状況。下写真は現在の修復状況。ソイルセメント塗布により表面の亀裂は目立たない。

第V章 まとめ

明徳官軍墓地は、熊本県内に20箇所ある西南戦争政府軍の官修墓地の一つである。今回調査では、全体配置図・詳細平面図作製に加えて各墓石の観察（略計測・石材観察・記銘の読み取り）を行なった。

墓地の形状・墓石の配置

本墓地は北面し、約374㎡の敷地に政府陸軍死者の墓石122基が、縁石で囲まれた区画ごとに整然と並んでいる。建設当初の形状をほぼ保ってはいるが、いくつかの変更もある。以下、主な点を列記する。

- 敷地全体の形状は、北面する道路幅に伴う後退に伴い1.5～2mほど狭くなっている。
- 軍夫墓については、1基が亡失し（本来は123基）、また、一部、配置が移動しているものがある。
- 区画No.2列には小さな地藏立像が付加されている。
- 新たに桜が植樹されている。
- 囲繞施設は、史跡整備に伴い擬木柵へと変更されている。

なお、墓石はNo.1－4 碓 繁三郎・No.2－11 美間田壽賀造の陸軍兵卒墓2基のみは複元墓であるが、その他は建設当初のものとみられ、オリジナルの墓石が殆どを占め、保存状態も良好であることが特筆される。これは、主に墓石材が硬質の安山岩であることに起因すると考えられる。

墓石の内訳は、尉官墓2基、下士墓17基、兵卒墓98基、軍夫墓5基である。区画の配置は、階級についてみると、これを明確に反映してはいない。特にNo.4列では、多くの兵卒墓が並ぶ区画内に尉官墓・下士墓・軍夫墓が混在している。本市七本官軍墓地・花岡山陸軍墓地、玉東町高月官軍墓地・宇蘇浦官軍墓地など、周辺の陸軍官修墓地では階級ごとに墓域や区画が分けられており、この違いは本墓地の特徴といえる。

墓石の形状・規模

墓石の形状は統一されており、棹石（墓標）は頭部角錐形の角柱（横断面正方形）、基礎（台）は上面が正方形の立方形で、尉官墓は2段、下士・兵卒・軍夫墓は1段である。墓石の規模は階級ごとに異なる。これは、明治10年12月3日付の文書「西南爆徒征討ニ付、戦死之者墓碑寸法並書式、御内定之趣、承知致候…」(Ref. C09082367700)などの規定を遵守したものであるが、軍夫墓については特に棹石高について規格性が乏しい。また、下士・兵卒墓についても棹石高に小さなばらつきが見られ、後者は規定2尺3寸に対し実物は67.5～68cm（約2尺2寸）が主体となっている。数値のばらつきについては、当時の加工技術の限界などによる可能性があり、また、棹石高が概して規定よりも低いことについては、製作地において規定遵守が厳密ではなかったためと考えられる。

墓石の石材と調整技法

墓石材は、軍夫墓2基を除いて安山岩製である。肉眼観察の限りでは金峰山系安山岩、特に金峰山東部の「島崎石」に共通する。「島崎石」は、江戸時代以降、建築部材・墓石などに多用され、明治時代初期作製の『肥後国郡村図』によれば、当該3箇所には石工職がおり、島崎村38戸・谷尾崎村8戸・宮内村4戸とある。本墓地の墓石製作については、これらの石工が関わった可能性が高いと考えられる。

調整は表面が研磨してあり、特に棹石について明瞭である。少ないながら数基において条線状の傷が認められる部分があり、これは石鋸による切断痕が残ったものとみられる。墓石を切断、整形した後、研磨調整した工程が伺える。

墓石の記銘の彫り方

記銘の彫り方は尉官墓2基の正面銘（階級・氏名）のみは断面U字形の竹彫りで、他は薬研彫りである。竹彫りはより丁寧な彫り方であり、これによって階層性を表現したものと考えられる。

墓石の記銘の内容と位置

記銘の内容と刻まれる面の位置は概ね統一され、例外3基を除いて正面に階級・姓名・「之墓」、右側面に所属、左側面に戦死日・戦死地、背面に出身地・籍が刻されている。他の県内官軍墓地を見ても同様でほぼ統一されている。内容を詳細に刻むために文字数が多くなり、棹石の4面全てを使用しなくてはならなくなったことによると推察され、これは、熊本鎮台の工兵第6方面提理代理、別役成義少佐の提言（Ref. C09082340800）、指令長官谷 干城少将の提言（Ref. C04028160400）に基づく規定による。実情を良く知る現地からの提言が採用されたものであることが注目される。

墓石の記銘の癖字・異字

墓石の記銘は能書家によるものと考えられる。本墓地の記銘において多用され、また特徴が共通する癖字の強い字形2種、第○聯隊…第中隊の「第」、歩兵の「歩」を見ると、周辺の七本・高月・宇蘇浦官軍墓地でも共通する字形が多く確認できる。特徴的な字形であることからみて、少なくとも同一人物による揮毫である可能性が高く、同一人物がこれら複数の墓地の墓石記銘に関わったと考えられる。

記銘の異字については、「與」が注目される。4箇所3種があり、いずれも異字である。画数が多い字なので、1人の書家が書き分けたというよりも、異なる書家の癖が反映された可能性が高いとみられる。また、軍夫を除く各墓石に共通する「戦死」は「戦」・「死」ともに3種類の字形があり、その組合せ方で5種が認められる。このことも書家個人の癖が反映されたものとみられる。以上、本墓地の墓石の記銘については、複数人の書家が携わった可能性が高いといえる。

本墓地と向坂の戦い

墓石記銘の所属・戦死日・戦死地を見ると偏在性が明確である。所属は近衛歩兵第2連隊第2大隊が72基（約58%）、戦死日は3月20日が94基（約76%）、戦死地は向坂が92基（約75%）で、本墓地は、3月20日の向坂の戦いにおける死者墓を主体とするものといえる。

向坂は本墓地の北西近くを通る旧豊前街道本道の坂道で、植木ー熊本間では唯一の難所といわれる。3月20日の向坂の戦いは、田原坂陥落後、熊本城（熊本鎮台）救援を目指す政府軍諸隊と背走する友軍を收容した薩摩軍との遭遇戦であった。戦闘は薩摩軍が優勢で、政府軍は植木口まで後退し、以降、両軍は4月15日まで植木・木留方面で対峙し、膠着した戦いを続ける。田原坂陥落後も城北方面の戦闘が続いていく契機となった戦いであり、本墓地がその戦地近くにあることの意義は大きいといえる。

なお、この戦いの戦死者墓は、本墓地の他に8墓地38基が確認できる。七本官軍墓地や高月官軍墓地のものは、当日の3月20日から旅団本営となった七本方面へと收容したことによるとみられる。戦地から離れた高瀬・山川・佐古・真田山の各墓地のものは全て当日の戦闘で負傷し移送され、その後、墓地近くの病院において死亡した人の墓である。「軍団病院日記抄」（『征西戦記稿』附録1887）には、木葉から高瀬へ、高瀬から久留米・長崎へ、長崎から大阪へと患者を移送したとの記述があり、怪我の程度によって医療環境がより良い病院へと後送する体制が整っていたことを示すものといえる。

本墓地建設の経緯

本墓地は、明治10年4月28日付、地元戸長から熊本県令・軍団本営に宛てた『官兵戦死骸仮埋葬御届』（Ref. C09084878000）などから、收容されずに戦地に放置されていた遺体を地元住民が近傍村5箇所仮埋葬し、これを改葬したものであることが判る。

本墓地の工事竣工、墓石建設日については、明治19年4月5日付、鮑田託麻宇土郡役所宛に近隣の鹿子木村副戸長が回答した文書がある。これによれば、「建設年月」は明治10年9月で、「石碑建設年月」は不詳ではあるものの「口頭ニテ地方ヨリ申出候」によれば、明治11年3月であるとしている。

報告書抄録

ふりがな	せいなんせんそういせき めいとくかんぐんぼち ちょうさほうこくしょ							
書名	西南戦争遺跡 明德官軍墓地調査報告書							
シリーズ名	熊本市の文化財 第129集							
編集者名	美濃口 雅朗							
執筆者名	美濃口 雅朗							
編集機関	熊本市教育委員会							
所在地	〒860-8601 熊本市中央区手取本町1番1号 tel 096-328-2111 (代)							
発行年月日	2025年5月							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査原因	調査面積
		市町村	遺跡番号	(世界測地系)				
明德官軍墓地	熊本市北区 明德町1277	43100	325	32° 88′ 14″	130° 69′ 83″	2016. 08. 16 ～ 2024. 10. 24	学術調査	約374㎡

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
めいとくかんぐんぼち 明德官軍墓地	墓地	明治時代	墓	墓石・区画を構成する縁石	西南戦争遺跡の構成要素

要 旨	<p>明德明德官軍墓地は、熊本県内に20箇所ある西南戦争政府軍の官修墓地の一つである。戦死者の墓石122基が、縁石で囲まれた区画ごとに整然と並んでおり、いくつかの変更もあるが、現状は明治10年(1878)9月の建設、翌年3月の墓石製作当初の形状をほぼ保っている。特に墓石については、オリジナルのものが殆どを占めており、また、保存状態も良好であることが特筆される。</p> <p>墓石記銘によれば、本墓地は、3月20日の向坂の戦いにおける死者墓が94基(77%)を占めている。向坂は本墓地の北西近くを通る旧豊前街道本道の坂道で、植木-熊本間では唯一の難所といわれる。3月20日の向坂の戦いは、田原坂陥落後も城北方面において膠着した戦いが続いていく端緒となり、その後の戦況を左右するものでもあった。本墓地がその戦地近くにあることの意義は大きいといえる。</p>
--------	--

熊本市の文化財 第129集

西南戦争遺跡
明德官軍墓地調査報告書

令和7年(2025年)5月

編集・発行：熊本市教育委員会

〒860-8601 熊本市中央区手取本町1番1号
tel 096-328-2111 (代)

印刷：有限会社あすなろ印刷

〒860-0821 熊本市中央区本山3丁目3-1
tel 096-335-8880